

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M・O・H通信

M・O・H Journal

- to communicate and convey the message of Shiga's traditional principles of M・O・H -

43号
2014
Spring

10 Anniversary



おかげさまで10周年

特集:しあわせ「夢を語ろう」

contents

目次

特集「しあわせ」— 夢を語ろう

執筆者

10周年メッセージ …… 3

運・鈍・根と三方善

地域にエールを 田原 総一郎 …… 5

M・O・H巻頭言

『あほ』になる修業をして来い 森 建司 …… 8

① M・O・H鼎談

比叡山を仰ぎみる滋賀から共生社会を発信する

嘉田 由紀子 & 小林 隆彰 & 森 建司 …… 9

② 寄稿 (高月観音の里歴史民俗資料館)

観音の里・湖北一ホトケを守る心 佐々木 悦也 …… 18

③ M・O・Hな人 伊吹編 (いぶきファーム)

公務員からファーマーへ 谷口 隆一 …… 21

いぶきのショップ紹介 …… 24

④ M・O・H座談会 (太陽生命保険、結びめ、湖国フォークスタジオ)

よそ者、ばか者、わか者 秋山 清重 & 西川 唱子 & 宇留野 元徳 …… 26

⑤ 寄稿 (能登川南小学校5年宙組)

『母なる湖 琵琶湖』 白根 拓実 …… 35

⑥ M・O・Hレポート (ダイフク)

サンショウウオが棲む森の傍らで製造業 佐々木 健 …… 37

⑦ M・O・Hレポート (ホリバコミュニティ)

おもしろおかしく! みんなで楽しむ地産地消 山本 和也 …… 41

⑧ M・O・Hレポート

輝け! 『アイキッズ』

中野 隆弘 …… 46

フォトエッセイ

春を迎える 辻村 耕司 …… 51

⑨ 寄稿 (あだーじょ)

あの人はいま… エコその先へ
一時代潮流はエシカルスタイル

岡 靖敏 …… 55

⑩ 寄稿 (循環型社会創造研究所)

変化の時代 藤田 アニコー …… 61

M・O・Hインタビュー

読者の皆様へ—

これまでを振り返り、未来へ向けて—
草野 勉 …… 65

スタッフ座談会

もうちゃん、好きだなあ …… 67

漫画

山暮らし子育て日記 オノ ミユキ …… 73

里のお話

三島池の春便り 三山 元暎 …… 75

本の紹介 …… 76

小舟木エコ村ウォーク (Vol.22) …… 77

～食hana咲かそう!～

食について話す交流会 ⑨ …… 78

『美の滋賀語り部マイスター』養成講座
…… 79

講演日記 …… 81

M・O・Hニュース …… 82

通信概要 …… 84

読者の声 …… 85

〈表紙作品〉

たかおとみ

糸糸氏は、大好きなMOHちゃん
と歴代のステキな冊子との
コラボレーションです。

10ANNIVERSARY!



周年メッセージ

M・O・H通信こそ、 未来を拓く社会への道しるべ!

滋賀県知事 嘉田由紀子

東日本大震災から2年半が過ぎた今、「遠いエネルギー」に依存してきた日本社会のひずみが一層きわだってきています。

たとえば原子力発電所。放射性廃棄物の処理の問題すら解決できず、次の世代に先送りをしたままで、安い電気を求める。これは倫理的に許されることなのでしょうか。

「もったいない」「おかげさま」「ほどほどに」。持続可能で豊かな循環型社会“懐かしい未来”にこそ、私たちが忘れかけている人間としての幸せがあるのではないのでしょうか。

未来につながる新しい価値観を、私たちの手で築くべき時が来ています。M・O・H通信からのメッセージを受け止めていただけたら、今日本人として何をすべきか、道しるべがみえてくるはずですよ。



嘉田由紀子

目的と手段に
森 孝之

アイトワの森

もったいない
おかげさままで
おかげさままで
いつもがみめて

玉垣 勝

NPO 法人麻生里山センター
理事

自分が気がついたこと
できることから
やりましょう!

徳永拓美
画家

農はいのち

麦の家 山崎 隆

麦の家 主人

不易流行

鶴岡 修

滋賀県立大学
准教授

M・O・Hの心を
さらに広げて まに10年!
サステナブルな社会の実現!

花田 真理子

大阪産業大学大学院
教授

写真家 今森 光彦

自然と文化が調和する滋賀県は、今こそ日本、いや世界に発信すべき情報をたくさん抱えています。毎号、近江の魅力を紹介している『M・O・H通信』。これこそ、私たちに必要な雑誌だと思えます。みんなで応援しましょう。

自然と文化に生きる

今森光彦



執筆者 M・O・H10

一隅を照らす

比叡山延暦寺 長騰 小林 隆彰

この言葉は、千二百年のその昔、比叡山を人づくりの山として開山された伝教大師最澄上人の願文(がんもん)の一節です。

M・O・H通信が、地球危機に警鐘をうながしつつ活動を続けておられるのは、まさにこの一隅を照らす浄業(じょうごう)であると確信しています。「言わざるは信の無きなり」という先徳の金言がありますが、M・O・H通信は、まさに社会に対し、ことに、自己のみの利益を追究する私たち人間に対して、堂々と真実の言葉を発し続けておられます。

この浄業に挺身しておられるみなさんに心からの敬意をささげさせていただくとともに、今後のご活動に声援をおくらせていただきます。



小林隆彰

たかが10年よれど10年
時の重みを感じよう
そして更に積み重ねよう

井上昌幸

滋賀県興業種交流連合会
会長

MOHの心で生きる

幸七の道

森建司

新江州株式会社
取締役会長

わたしのM・O・H

児童文学作家 今関 信子

この地に根付いて生きたい。隣人の存在を意識して、この時代を見つめたい。人が生きる社会の有様を、それを包んでいるものを、考えて暮らしたい。日頃、そんなことを思っていた私はM・O・Hと出会いました。

M・O・Hは、さまざまな人々が混じり交わる中で、まじめに意見をぶつけ合っています。そこで、くりかえし問われ、考えられていくM・O・Hの精神を、私は、大切にしたいと思っています。



今関信子

MOHの歩みで10年を歩け、
次の10年も
のんびり着実にいこう。

川藤乙明

琵琶湖環境科学研究センター
センター長

MOHは
いつも心にも喜び
身にも歡べる人生の
道いふべ

三山元暎

真勝寺前住職





地域にエールを

運・鈍・根と三方善

田原 総一郎

ジャーナリスト

私は、彦根で生まれて育ちました。

近江商人の末裔です。だけでも、子ども頃から商人というものが嫌いでした。近江商人の歩いたあとには草も生えない。つまり、強欲(非常)に欲がふかいこと(で吝嗇(もの惜しみを)する)こと(だ)といわれていたからです。

だから、商売と関わりが深い、銀行や商社、メーカーやデパート、スーパーなどには就職したくないと思ひ、金の取引と縁のなさそうな、ジャーナリストになつたのです。

しかし、三十代になつて考え方が大きく変わりました。近江商人が金儲けではなく、お客さんの役に立つこと、お客さんから信用されることを何よりも大事にしていたことがわかつたからです。そして、幼いときに祖母が何度もいつた言葉を思い出しました。

「商人というのは三方よしや」

お客さんにとつてよし、世間にとつてよし、そして自分にとつてもよしになる。つまり、客に信用されること、そして社会から信用されることで、自分の商売もよくなる、ということです。

現在では、少なからぬ経営者が「三方善」を唱えています。私は幼い時にききながら、その意味がよくわかつていなかつたのです。

さらに祖母が「ウン・ドン・コン」と、口ぐせのようにいつていました。これも聞いたときはよくわからなかつたのですが、成人してから「運・鈍・根」ということだとわかりました。

仕事成功するか否かは運のよしあしによる部分が多いですが、近江商人たちは、運というものは、自分が開くのだと考えていました。まず鈍(にぶいこと)になる。賢(さか)し(ら)げ(利口)そうにふるまうこと(に)要領よく立ちまわつたり、小細工などしないで、いわばバカ正直に、徹底的に根気よく挑戦し続ける。そうすれば運が開けるといふのです。

そういえば、京セラの稲盛和夫氏が、「世の中に失敗というものは無い。チャレンジをあきらめた時が、失敗というところになる」と、いつていますが、チャレンジを鈍と根でくり返せば成功するといふのです。

いまさらながら、わが故郷の先輩で

ある近江商人の道理を噛み締めたいと思ひます。

私は、今年で八十才になりますが、何とか現役でやつています。その私が三十代以降、外さないで守つてゐるのは、「運・鈍・根」と「三方善」です。

そのために現役で続けられているのだと思つてゐます。

こなや、かに
したたかに
田原 裕一 記

●たはら そついちろう(1934年滋賀県彦根市生まれ、早稲田大学文学部卒業。岩波映画製作所、テレビ東京を経て、1977年フリーに。現在は政治・経済・メディア・コンピュータ等、時代の最先端の問題をとらえ、活字と放送の両メディアにわたる精神的な評論活動を続けている。2002年4月より母校・早稲田大学で「大隈塾」を開講、未来のリーダーを育てるべく、学生たちの指導にあたつてゐる。2005年4月より早稲田大学特命教授。





し あ わ せ

～夢を語ろう～

日野町南山王祭のほいのぼり。
花をのぼりで再現している。
春を待つ人々の想いが空に映える



私事で、しかも昔のことを語って申し訳ないが、私は高校を卒業するとすぐに「丁稚奉公」に出された。当時、商人の息子は後継者の修業として「丁稚奉公」を経験するのは普通のことであつたようだ。今から六十年ぐらい前のことだ。女性も花嫁修業の一つとして「女中奉公」もした時代のことである。

このような奉公のシステムというのも、私の世代で終わったように、小さな「お店」でも社員として雇用するようになっていった。

(当時、近江商人の息子は、奉公先は滋賀県人が経営する、日本橋の織維問屋であり、主人以下働いている人もほとんど滋賀県人であつた)

その「丁稚奉公」はその後の私の生涯にとつて得難い貴重な経験になつた。昭和十一年生まれの私にとつては軍隊等はしらず、団体生活も疎開先でのささやかな経験だけで、それが人生を

生きる上で大きな支えとなる、「辛抱」を生むところまでは到底至つていなかった。

当時は大学進学率も極めて低かつたが、大学を目指して勉強に集中する周囲の友達とともに、机を並べてそれなりに頑張つていた私に、ある日父が突然こんなことを言い出した。

「解つているだろうが、お前は卒業した

『あほ』になる修業をして来い

森 建司

の中に世渡りや商売人の勘やらコツがいつぱい詰まつてる、そのことを忘れたらあかん。あほになるのも大事な修業のうちや。わかつたか」
(……え！あほになる修業?!)
私は言葉を失つた。たつた今の、この瞬間まで、毎日勉強して賢くなる修業をしてきたのではないか。
(親父はほんまにあほになつたんと違うか……)

さてここで、日

夜、現代社会に生

き抜く努力をして

おられる読者の皆

さんにお尋ねしたい。

「あほになつて、体で覚えてこい」

この言葉をどう思われますか。

出来ましたら、次号で読者の皆さん

と議論をしませんか。ご意見をお待ち

しています。

(これはもちろん浪速芸人の修業の話ではありません。)

そして意外な言葉を付け加えた。
「いいか。丁稚奉公に行くつてことは『あほ』になる修業をやるいうことや。『あほ』になるということは、頭でなく身体で覚えるということや。その修業



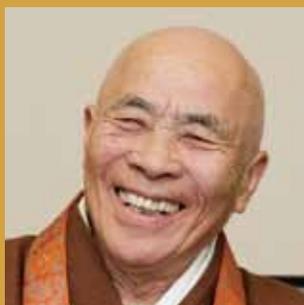
〈しあわせ「夢を語ろう」〉

比叡山を仰ぎみる滋賀から 共生社会を発信する



嘉田 由紀子

滋賀県知事



小林 隆彰

比叡山延暦寺長
天台宗大僧正



森 建司

循環型社会システム研究所 代表

森厳な比叡山延暦寺の境内で嘉田滋賀県知事と小林長騰に『M・O・H通信』のこれまでの10年を振り返りつつ、滋賀の魅力について、共生社会の実現に向けて何をすべきなのか、そして人間にとって本当に大切なことは何なのか、忌憚のない意見交換をしていただきました。

■比叡山延暦寺（大津市）

■2014年1月13日



近江ならではの
M・O・Hの哲学

森 何をもって人は幸せと思うのか。経済的に豊かになること、つまり競争社会で打ち勝つことが幸せであるという考え方と、みなと仲良くやることだという考え方、いまは真つ二つに分かれるように感じます。いまのところは経済社会の方が多数派を占めているのですが、これからは共生型が増えていくか、これからは共生型が増えていくかについて、嘉田知事はどうお考えですか？

嘉田 「もつたいない・おかげさま・ほどほどに」という持続的社會を求めるのが『M・O・H通信』の哲学ですね。そういう考え方は、比叡山や琵琶湖とともに生きてきた近江ならではだろうと思いません。外から滋賀に惚れこんだ立場としては、ぜひこの哲学を活かしていただきたい。

森 ほう、『M・O・H』の哲学ですか。知事に言っていたら、こちらが気づいているようではいけませんね(笑)。

嘉田 幸せで日々その価値を享受していたら、人は気がつかないものですね。

森 子どもの頃に「琵琶湖をみたら、これは自分の家の泉水だと思え、伊吹山をみたらうちの築山だと思え」と言われて育ちました。

嘉田 いい言葉ですね。

森 そういふ風に自然を大切に守っていかないといけないと納得はするのですが、滋賀生まれの人だとそれだけで止まってしまふ。嘉田知事がいまおっしゃったように、滋賀の人にとって琵琶湖が美しいのは当たり前で、その価値に気づいていないということなのでしょう。

嘉田 それだけ優しい自然ということなんですすよね。荒々しくないんです。確かに、なくなつて初めて価値がわかるということがありますね。もともと日本は地震多発、梅雨の豪雨、台風など災害大国だったんです。そして、地域社會の調査をしてわかつたのが、洪水とか地震などの災害から立ち直るときのコミュニティの力がとっても強いということ。その力が日本を維持して

きたと思います。

しかし、東日本大震災は復興がむずかしい。地域に財力がないというだけではなくて、原発事故による放射能汚染への不安があるからです。原発は人間が制御できる技術なんだろうかと。これは日本人にとって1000年、2000年の宿題を与えられたようなものです。

森 学識のある人が經濟の魅力に負けて原発を認めようとしていますよね。私たちのような知識がない者でもわかるじゃないですか、原発はやめた方がいいということ。

嘉田 逆に、田舎に住む生活者の方が人間として自分たちに何が大切かわかっているんですよ。

森 政治家や学者は科學技術が經濟に直接プラスすると考えていますから……。

嘉田 そうなんです。科學技術は「HOW」の學問ばかりやつてきて「WHY」なぜこの學問が必要かということを疎かにしてきました。

森 持続可能社會へ移行していくためには、共生社會を生みだしていくシンク



タンクのようなものが要るのではないかと思うんです。学識経験者の中から、そういう声が上がっているのですが、そこに生活者の方も入っていただければと考えています。

● 続けることの大切さ

森 いまの科学技術をもとにした経済社会では、心の問題が置き去りにされているように感じます。科学技術すべてが人類にプラスになるかというと、核の問題のようにマイナスの面も大きい。核装備や温暖化などの問題について世界中の人が自覚するとい

うのはむしろかしいでしょう。国際的な宗教サミットのように、宗教がそういう働きかけをやってくれたらと思うのですが。
小林 宗教サミットは私が言い出したんですよ。
嘉田 そうだったんですか！ すばらしいですね。
森 宗教サミットで

は、世界平和を目指そうというような協議をされているのですか？

小林 私たちが宗教サミットを始めた頃から、どの宗教でも自分たちが正しくて他の宗教は間違っているというような排他的な感覚はだんだんなくなりました。

森 そういうことが世界平和につながっていくのかもしれないね。

小林 相手を否定する心があると戦争になります。ここでサミットをやったときはキリスト教とイスラム教の関係はむずかしかった。しかし、話を互いに聴けば姿形は違っても心は一つだということにだんだんなりました。それが、私たちがやった宗教サミットの効果だと思っています。

森 私は共生社会とは何かをいつも考えています。宗教がその先鞭をつけてくださらないと実現できないんじゃないかという気がしてなりません。

小林 宗教サミットも重ねて重ねて続けていかないとね。1回だけの打ち上げ花火のようではいけないです。

嘉田 1987年から始められて、いま





「平和を願う心に境界はない」納得の表情の嘉田知事㊟、小林長騰㊟、森代表㊟

も毎年やってらっしゃいますよね？
小林 はい。よく話し合ってみると、みな同じで最後に求めるのは平和であるとわかってくる。他を否定しないことです。平和に対して文句を言う人は

薬師さまと千年の灯明に心を動かされました。行き帰りに琵琶湖の風景をみて「こんなところに住んでみたいな」と。15歳の少女の心を震わせたのはこの比叡山でございます。

ないですから、それではみんな通じ合うようになる。それを続けることが大事なんです。

琵琶湖と周辺の山々は神と仏の住まう場所

嘉田 実は、私は比叡山に人生の恩を感じております。

小林 それはどういうわけ？

嘉田 埼玉県の中学校に通っていた15歳のとき、修学旅行で比叡山延暦寺の根本中堂に出会ったんです。みごとに杉木立とお

小林 そう言っていたら、私も感激です。

嘉田 比叡のお山がみえるところに伊崎不動があり長命寺があり竹生島があり、善水寺をはじめとする湖南三山がある。琵琶湖とその周辺では比叡山の峰がみえるポイントポイントに天台宗のお寺が作られているんですよ。琵琶湖と周辺の山がセットで神と仏の住まう場所。このすばらしさになぜ気づかないんだろう、このすばらしさを発信したいという思いがずっとありました。

小林 私たちも毎日そういうことを思っています、それを感じておられるのはすごいですね。

嘉田 自分はなぜこの風土、滋賀の山と琵琶湖にひかれるんだろうということをずっと人生の課題にしてきました。アフリカをはじめ世界中を歩いて、世界中の湖をみてきましたけれど、琵琶湖ほど神々しい湖はないと自信もっています。例えば私が好きな仏像、湖の中から生まれたという「湖中出現の薬師如来」は小さな仏さまなんです、眺めていると涙がでますよ。





「お薬師さんと不滅の灯明を輪番で守っています」小林長臈

森 さすが琵琶湖博物館をおつくりになった方だから、思い入れが違いますね。

嘉田 あそこでは琵琶湖の価値を表現しました。いまは「美の滋賀」の拠点となる新生美術館に向けて準備を始めています。仏教美術を中心とする1000年の美、小倉遊亀さんや野口謙蔵さんの1000年の美、そして芸術の教

育を受けていないけれども心の叫びとして表されるアール・ブリュットという今の美、この三つの美を集めた新生美術館として近代美術館を魅せたいと考えています。

古くからの慣習には 深い意味がこめられている

嘉田 小林長臈はどこのご出身ですか？

小林 香川県です。

森 私は大阪の堺市の生まれで、小学校3年生のときに疎開で大阪から滋賀の親戚の家へ来て、その家の養子になつてずっと滋賀です。

嘉田 じゃ、香川・大阪・埼玉の出身で、3人ともよそ者ですね(笑)。

森 さきほど滋賀県に生まれ育った人は滋賀県に関心がないという話が少しでした。滋賀県で活躍されている方は、嘉田知事も含めて県外の方が非常に多いんですよ。ここで、滋賀県人が立ち上がるための示唆をいただきましたが、

嘉田 「不易流行」という言葉があります

「やっかいなことを喜んでさせていただく」森代表



すね。よそから来た人はある意味「流行」に乗ってくるんですけど、「不易」を支えているのは土着の人たちなんですよ。

森 不易流行について、もう少し詳しくお話しいただけますか。

嘉田 私は「不易」「流行」の両方が必要だと思います。毎日、連綿と仏さんの



「本然教育で地域の価値がわかるはず」嘉田知事

鍵を開けてお参りして、「なぜ？」ときいたら「当番が回ってきたから」「これは先祖代々守らないといけない」。それ以上は語らない。私のように屁理屈は言わない(笑)。「昔からやっているから」、それが一つの価値だろうと最近思うようになりました。地域の中で米を作り蚕を育て神社を守る…連綿と同じこと

をやることに満足できる人じゃなかったら住み着けないんですよ。何か変わったことがしたいと思ったら外へ出るわけです。外へ出る人がいてもいいし、地域に連綿と住む人がいてもいい。「山は山、当たり前やろ」と言える人が羨ましいですよ、よそ者にしたら。

森 うちが浄土真宗で、わずかな門徒で一つのお寺の維持をしています。毎月2万円ずつの貯金を全員が長年やってきて、この間やつと屋根の葺き替えをしました。私も70歳代後半になって、お寺にお参りすることで落ち着き、自分の行く先・居場所に思えてくるようになりましたが、若い者からは古くからの慣習に対して「なんでこんなことをせんなんの？」と疑問の声がでるんですよ。そして、疑問をもった人たちは出て行ってしまうんです。

嘉田 人間は何であるか、自然は何であるかという本然教育をしていたら、もつと地域の価値がわかって土地に人が住み着くと思います。明治以降、みんなが経済成長する大都会に憧れて、地方から人を吸い上げてしまった。本然

教育をしているドイツや北欧では、都会に人が集まりません。若い人たちは都会で教育を受けて、また自分の故郷に戻ります。

森 ほう、ドイツや北欧はそうなんです。私が子どもの頃は、実るほど頭を垂れる稲穂かな、というように、たくさん寄付できるのはありがたいことだと頭を垂れないといけない。やっかいなことを喜んでさせていた、だくといような考え方がありました。そういうことが地域を守る大切な思想だったんですね。

小林 私は戦時中の18歳のときからここにいますが、比叡山も戦後はごろつと変わりました。それでも、輪番ですつと泊まりこみで根本中堂のお薬師さんのお世話をして、不滅の灯明をずっと守るのはたいへんなことです。毎日夜も昼も油が絶えないようにしなくてははいけない。何かの時のために代替えの灯も用意しておかなくてははいけません。当たり前のように思っているけれども、その当たり前がたいへん内容が深いと思います。



森 最後に、これからの夢を語っていただけますか。

小林 仏教の基本には、死んでも来世があるという三世思想があります。最近ではあまりそういうことを言わなくなりりましたが、私は交通事故に遭って4分間も手術中に生命が止まったことがあるんです。そのときに仏が見えるという経験をしました。それ以来、「来世がある」「死んでも向こうがある」「明日のために」といつも考えるようになりました。

嘉田 臨死体験をされたのですね。

小林 そうです。「明日のために」の「為」を、「自分のために」ではなくて「誰かのために」「世の中のために」とだんだん大きくしていきこうというのが今の私の気持ちなんですよ。そういう気持ちでみんなが生きれば世の中が良くなるんじゃないか、戦争がなくなるんじゃないか。

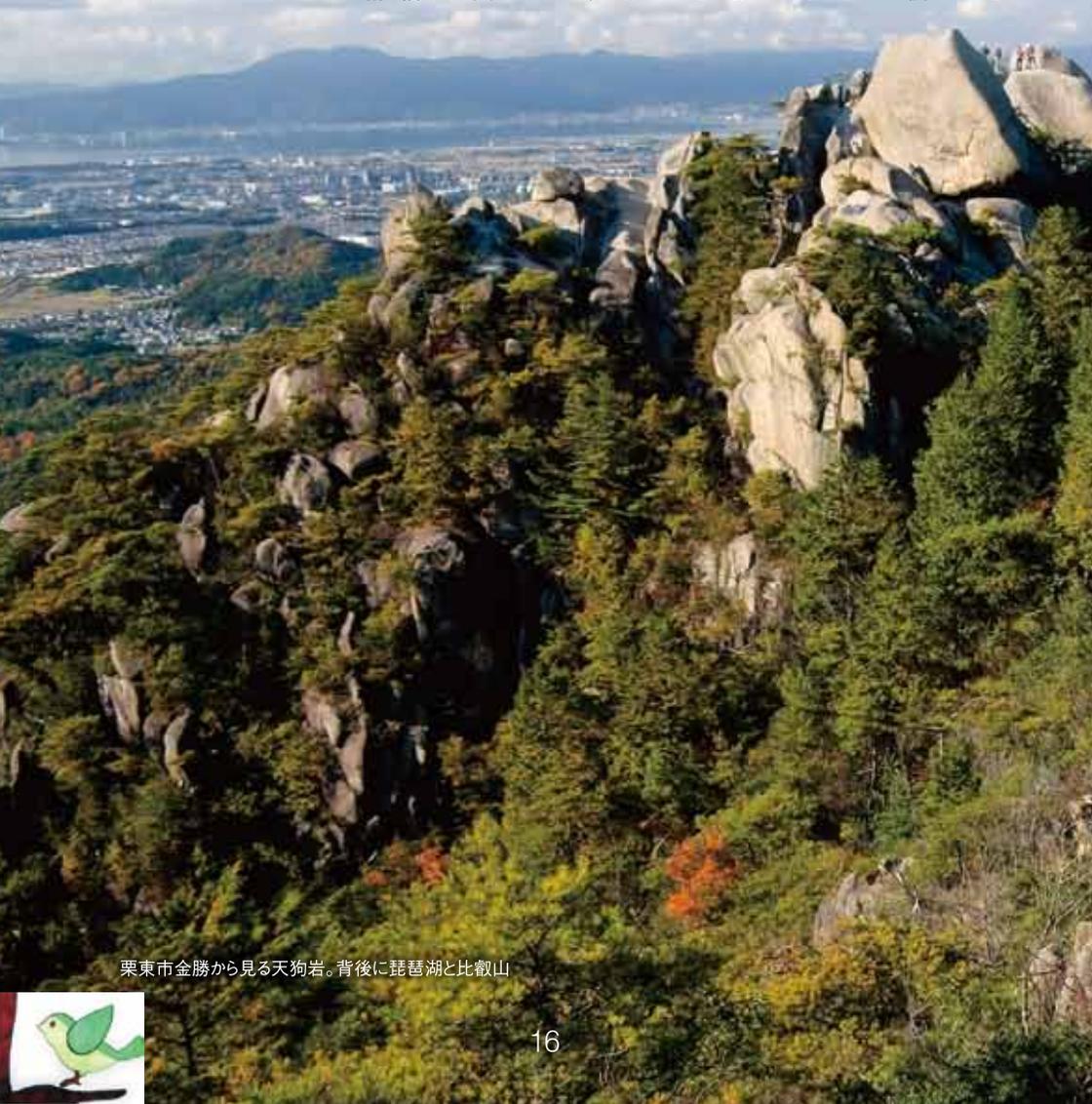


〈夢を語ろう—①〉

「為」という文字を大きくしたいというのが私の願いです。

嘉田 私たちは今までモノの価値を大事にしてきました。それはそれで大事なんですけども、モノには必ず出来事があるんですね。誰がどのようにそれを作ったのか、そこにどう魂を入れたのか。モノと出来事と心、つまりハードウェアとソフトウェアと、ソフトウェアをセットにして地域の元気を取り戻していきたいと考えています。そのために、今度リニューアルする琵琶湖博物館や新生美術館に加えて、世界の人にみていただけるような芸術祭…生活文化を取り入れた琵琶湖芸術祭をしたいなと思っています。あとは文化・スポーツを通して熱中体験をもった子どもを育てていきたいですね。

『M・O・H通信』では、これからの10年で何を目指されますか？



栗東市金勝から見る天狗岩。背後に琵琶湖と比叡山



森 科学技術は経済と結びついて非常に進歩しました。しかし、科学技術に携わる人たちは、心に関わることや歴史・文化より、目の前にある発明に集中しています。私は歴史や文化にもっと目を向け、人の心がきちんと評価される社会にしたい。これからも『M・O・H通信』の活動を通して、競争社会と共生



根本中堂に心を寄せる三氏

社会の共生ができるようにしていきたいと思っています。

今日は身の引き締まる比叡山で、『M・

まっすぐに、しなやかに
嘉田由紀子

●かだ ゆきこ 1950年、埼玉県生まれ。アメリカ・ウイスコンシン大学大学院修士課程、京都大学大学院農学研究所博士後期課程修了。農学博士。琵琶湖研究所主任研究員、琵琶湖博物館総括学芸員、京都精華大学人文学部教授を経て、2006年7月より滋賀県知事に就任。現在二期目。趣味はカラオケ、孫と過ごすこと。特技は手打ちうどん、地図が読める。座右の銘は「まっすぐに、しなやかに」。

お返しのころ
比叡

小林隆彰

●こばやし りゅうしょう 1928年、香川県善通寺市に生まれる。1952年、比叡山専修院卒業。1955年、延暦寺一山千手院住職。比叡山延暦寺執行、延暦寺学園叡山学院院长、延暦寺学園所長など要職

O・H通信』の今後につながるさまざまな示唆をいただけて感激しました。ありがとうございました。

を務め、現在は延暦寺長職。主な著書に『生きていく観音経』（金文堂）、『智証大師円珍』（東方出版）、『比叡の心』『花咲け人咲けいのち咲け 歩けなくても心咲け』（紫翠会出版）など。

勇氣源
いの壁を打た破れ
森建司

●もりけんじ 1936年滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州(株)取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会相談役など。

〈著書〉『吃音はなある』遊タイム出版『循環型社会入門』新風舎、『中小企業にじかできない持続可能型社会の企業経営』サンライズ出版、『中小企業相談センター事件簿』サンライズ出版。

●比叡山延暦寺

滋賀県大津市坂本本町42200
TEL: 077-578-0001 (代表)



② 寄稿へしあわせ「夢を語ろう」

観音の里・湖北

―ホトケを守る心―

佐々木悦也

高月観音の里歴史民俗資料館
学芸員

重文 千手観音立像
(長浜市高月町唐川 日吉神社(赤後寺)蔵)

「湖北を制する者は天下を制す」。よく耳にする言葉である。北国街道・北国脇往還・湖上交通も含め、湖北の地は畿内と北陸・東国を結ぶ交通の要であり、戦国期には戦略上の重要なルートとして、武将達は盛んに往来を繰り返した。姉川・小谷城・賤ヶ岳・関ヶ原、いずれの合戦もこれら道筋が大きく関わり、湖北の地を舞台に幾たびもいくさや焼き討ちが繰り返された。そのため、湖北地方には、中世以前に遡る建造物は存在しない。

己高山周辺の天台寺院の多くは衰退して無住・廃寺化し、そこに残された尊像たちは、村の守り本尊として民衆に迎えられていたのである。観音をはじめとする仏たちは、村々の小堂にひっそりと安置され、村人らによって手厚く守られてきた。





如来形立像
(長浜市木之本町黒田 安念寺蔵)



菩薩形立像
(長浜市木之本町黒田 安念寺蔵)



僧形坐像
(尾山白山神社蔵)



重文 十一面観音立像
(長浜市西浅井町山門 善隆寺蔵)

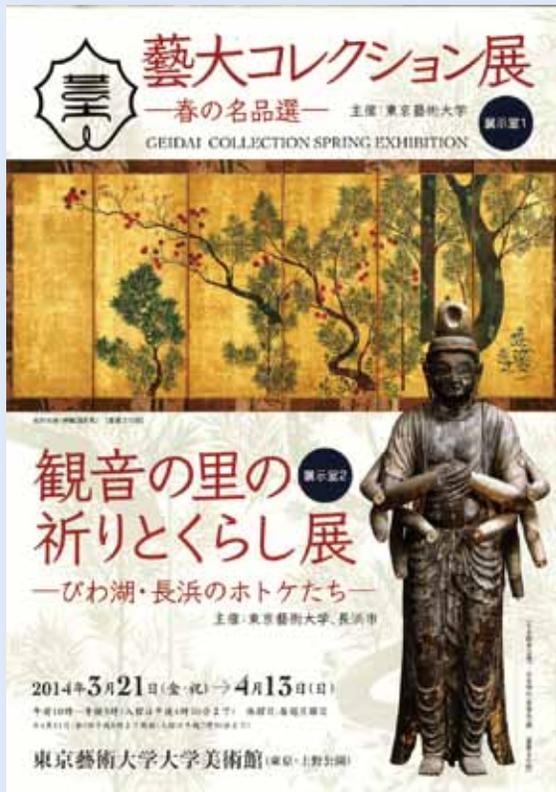
湖北の村々を歩くと、いくさのさなか、仏像が焼かれたり壊されたり奪われたりしないようにと、村人が仏像を土や田んぼの中に埋めたり、川に沈めたり、また担ぎ出したりして、戦渦を逃れたというエピソードをしばしば聞くことがある。

真宗門徒が大多数を占める湖北地方における観音信仰は、現世利益を願う直接的な観音信仰と一線を画するものがあると考ええる。宗派・宗旨・教義といった枠を超越して、聖なるモノ、神やホトケを無条件で大切にしている心が、湖北の人々に今も受け継がれている。観音だけではなく、古き良き伝統・文化などを大切に、湖北地方の伝統の心である。その心が、数百年にわたって、受け継がれてきた。

湖北の観音は、地域の暮らしに根付き、地域の人々の生き方や暮らし方、風土と分かちがたいものがあり、そのこと自体がまた大きな特色でもある。

制作年代の新旧や指定の有無、造形的な巧拙、損傷の有無等といった世俗的な価値観を越えて、それぞれ自分の村のホトケたちを限りなく誇りと親しみと





M・O・H通信の地元は長浜です。地元の風土に育まれて今日があります。風土とは観音様への祈りとくらしです。

長浜で代々守り継がれてきた重要文化財を含む18軀の観音像(すべて東京初出展)とともに、長浜に息づく精神文化や生活文化である「観音文化」をご紹介します。観音像の優れた造形とともに、湖北の観音文化に触れていただき、一人でも多くの方に観音像とのご縁をつないでいただければ幸いです。

お問合せ：東京藝術大学大学美術館
TEL:03-5777-8600(ハローダイヤル)
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

●高月観音の里歴史民俗資料館
滋賀県長浜市高月町渡岸寺220
TEL:0749-80-2270
<http://www.city.nagahama.shiga.jp/section/takatsukirekimin/index.html>

●ささき えつや||高月観音の里歴史民俗資料館の開設準備から携わり、今年で30年を迎える。湖北地方の仏教文化をはじめ、歴史・民俗など幅広く調査研究をおこなうほか、各種講座の企画運営、地域の文化財の保護、メディアを利用した文化情報発信などをおこなっている。2012年秋には、長浜城歴史博物館と高月観音の里歴史民俗資料館において開催された、特別展『湖北の観音』を担当した。

縁
は
木
悦
也

愛情を持って手厚く守っている。いや、「守る」というより、「守らせていただく」ご縁を感謝して暮らしている」と言ったほうがしっくりくるかも。今日なお守る心は湖北の地に息づいている。

びわ湖に注ぐ姉川の源流地域、伊吹山の山村集落に拠点を置く「いぶぎファーム」。代表の谷口隆一さんは農業体験や宿泊体験などの企画を手がけ、自らもファーマー（農家）として伊吹の伝統野菜を守り続けている。公務員から一転し、ファーマーになったきっかけとは？ 谷口さんの元気の源を探った。

- 2013年12月10日
- 大門坂荘（米原市大久保）

いぶぎファーム代表
谷口隆一

公務員からファーマーへ



第二の人生のはじまり

谷口さんがファーマーになったのは1年前。長年勤めた公務員の定年を3年残し、57歳から生まれ育った伊吹の地で第二の人生を送っている。

お話を聞いた「大門坂荘」は、「いぶきの源流の会」の会長でもある谷口さんが管理する築100年を超える木造平屋建ての民家を改修した田舎体験施設。囲炉裏が温かく、居間からは山のパノラマが目の前に広がり大迫力の景色が望める。ここでは農家民泊として、年に4〜5回、修学旅行生を受け入れている。都会に暮らす子供たち



古道から見る大久保集落

にとつて、田舎には魅力的なものがいっぱい！ 大声で「おはようやまびこが返ってくる」、道を歩けば「ニコニコ声を掛け合う」。都会では味わえない解放感！「ここはいいなあ」と子供たちも癒されるようだ。そんな様子を見て、谷口さんも田舎の良さを再確認できるといふ。

土間に入ると谷口さんが育てた伊吹大根、白葱、白菜など立派な野菜が並んでいた。どれも瑞々しくおいしそう！ 12反の土地で野菜や果物を育てている。

この地域には「伊吹大根」と呼ばれる伝統野菜がある。またの名を「伊吹辛み大根」、「ねずみ大根」とも言い、その名の通り味は辛く、丸みを帯びたねずみのような形が特徴的。伊吹山の寒く厳しい気候の中で辛抱強く育つ。「辛みの中に甘みもあって病みつきになります。おろし大根と子ジャコを混ぜてポン酢で食べると本当にうまい！」と谷口さん。

これらの野菜の販売も行っている。

伊吹大根を守るために谷口さんはファーマーになった。時代の流れとともに農地が減り作り手もいなくなっていく。15年ほど前に農業が好きだった父親を手伝い、山

を開墾して畑を蘇らせた。「過酷だけどロマンがあると思う」と当時を振り返る。

役場での経験を経て

谷口さんは学校卒業後、父親の勧めで伊吹町役場に勤めることになった。当初は都会への憧れがあったが、建設や測量の仕事に従事する中で、地域の人の暮らしが良くなり喜ばれることに魅力を感じていった。

40歳で伊吹町の総合計画を企画した時に、町全体を屋根のない博物館に仕立てようとエコミュージアム構想ができあがった。その中で、自然がきれいで人が住めるだけでは地域は維持できない、ということを感じた。自然環境を大切にしながら、そこに連続と地域を守り生き続けることが大事と考え、地域に密着した事業・コミュニティビジネスの拠点を作った。

それが道の駅「旬彩の森」。地域で採れた野菜を置き、それらを使った商品開発や物品の販売に地域の人に関わっていく。新鮮な野菜を置くだけでなく、野菜を育てることが田畑を守り、人を元気にするのだと谷口さんは言う。「旬彩の森」の周辺には



伊吹牛乳で有名な「ミルクファーム伊吹」や食事処「伊吹野そば」、「若いぶき」で賑わっており、観光客からも人気のスポットとなっている。

夢はあつしう

そんな経験を経て立ち上げた「いぶきファーム」。豊かな自然環境、いぶき大根をはじめとする伝統野菜、そこに生きる人々と文化がここにはある。夢は、「コミュニティビジネスの中で地元のもの大切にすること。都会の方々に伊吹の自然に癒されに来て戴く事で、地域にも潤いが生まれるようにしたいです」。

「定年まで働いてやれやれと思って仕事を辞めたら、意気込みがなくなってしまうと思って。5年前から夢を抱いて、計画を立ててきてたんです」。

ある程度人生経験を積んだ人こそ、そのスキルを活かして「コミュニティビジネス」に関わるのが良いとつづ。今は野菜の世話などのため60〜70歳のパート従事者を雇っている。今年の4月から地元大久保で加工・体験のできる拠点施設を地域の仲間と共に



「自然薯もありますよ」シカも雪もなしのその、父の志を受け継ぐ谷口氏

設置し、いずれ常雇用できるようにしたいです」。

「やっぱり楽しいのが一番」

揺るぎない自信を持ち、楽しく仕事をさせている谷口さんだが、一人では何もできないとつづ。

「モチベーションが通じる仲間がいて、お互いの専門分野で補い合いながら進めると自分にはなかった発想が生まれたりします。話し合いの後にはいつも飲み会でごんちゃん騒ぎ(笑)」。

自分の夢を持ち、それに向かって明るく挑戦していくことで苦労を苦労と感じない。それ以上に、乗り越えた喜びがある。

人生を楽しむ谷口さんの「うしさ」が光っていた。

「あと15年、73歳まで今の仕事をやりたい。そのあとはまた第三の人生が待ってますからね。まだまだ楽しみは尽きません」。

楽しく
毎日
過ごしたい
谷口隆一

●たにべちりゆついち1956年滋賀県生まれ。1974年旧伊吹町役場に就職。観光・農業振興に従事。企画等で伊吹町総合計画や菓草の里の建設等を担当。伊吹の里(道の駅)の企画建設に従事した。2013年3月米原市役所退職。同年4月、いぶきファーム代表として農産物生産加工を始める。別に伊吹の源流を考える会(2000年発足、会員25名)の会長として、伊吹の大自然の環境保護活動やエコツアーなどを行っている。

いぶきファーム

滋賀県米原市大久保10094

TEL:0900・1078・6111

FAX:0749・508・1771

<http://www.ibukifarm.com>

いぶきのショップ紹介

滋賀県米原市伊吹地区の元気なショップをご紹介します!
いずれも名神高速道路関ヶ原ICから約20分、
北陸自動車道長浜IC、米原ICから共に約15分のところにあります。



「JAの経験を活かして」
伊藤駅長



店内は地元産で満載



雄大な伊吹山。夏はお花畑。日本そば発祥の地

道の駅 伊吹の里 (旬彩の森)

辛みが特徴の「伊吹大根」や紅色が美しい「赤丸かぶ」の伝統野菜をはじめ、オリジナルのドレッシングや餡などの加工品を販売している。食事処「穂波」は地元食材を使ったこだわりメニューが自慢だ。季節に沿った体験メニューや展示会も開催され、2階テラスから望む四季折々の伊吹山の景色も魅力の一つ。

駅長の伊藤さんがおススメするのは、パン工房「樞の美」が提供する季節限定の「旬彩ロールケーキ」。もちもちの生地とクリームに、洋ナシに似た食感の伊吹大根がよく合う。地元の生産者、スタッフの想いが込められた一品をぜひ上げられ。

- 住所：滋賀県米原市伊吹1732-1
- 営業時間：農産物直売所9時半～17時
お食事処 (平日) 11時～14時
(休日) 11時～15時
- 定休日：4月～12月無休
1月～3月毎週木曜定休
- TEL：0749-58-00390
- FAX：0749-58-04006
- E-Mail：ibukinsato@aztv.ne.jp
- http://www.shunsainomori.com/top/index.htm

■ミルクファーム伊吹

しぼりたての生乳を85℃で15分殺菌した「伊吹牛乳」は、舌触りが甘くまろやかなコクが人気。伊吹山の豊富な葉草を含む良質の牧草や自然豊かな環境がおいしさの秘訣だ。米原市や長浜市、愛荘町の一部では学校給食で提供され、子どもたちは、伊吹の味で元気に育つ。この牛乳の特性を活かしたこだわりのアイスクリームやプリン、ヨーグルトも自慢の商品だ。

代表の三家さんは、「この味を守りながら、お客様のニーズに合わせてチーズやバターなどの新商品作りにも挑戦したい」と意欲をみせている。豊かな自然の中で生まれた伊吹の味をご賞味あれ。

- 住所：滋賀県米原市伊吹80
- 営業時間：8時～17時
- 定休日：無休
- TEL：0749・588・0049

■そば処「伊吹野そば」

日本そば発祥の地、伊吹。昼と夜の気温差が大きく、そば作りに適した環境で育った良質のそばを自家製粉している。添加物を一切使用せず、伊吹山麓の霊水で打った



2



1



4



3

1 ミルクタンクが目印 2 三家さん[Ⓢ]とスタッフ 3 伊吹野そばはいつも賑わう 4 若いぶきは春からが楽しみ

本格そばが味わえる。

人気メニューは、さっぱりとした辛みが癖になる伊吹大根を使用したおろしそば。伊吹そばと伊吹大根のコラボレーションは、一度は食してみたい一品だ。

- 住所：滋賀県米原市伊吹516
- 営業時間：(平日) 11時～17時
(休日) 11時～18時
- 定休日：無休
- TEL：0749・588・1712
- <http://www.ibukisoba.co.jp/>

■若いぶき

奥伊吹の清流に棲むイワナや豊かな自然の中で育った新鮮な山菜を贅沢に使ったこだわり料理でおもてなし。

併設された薬草風呂では、伊吹で育ったキハダ、ドクダミ、ヨモギなどの薬草を天日干しし、煮出したものを使用しており、疲れた体をじっくり癒してくれる。

- 住所：滋賀県米原市伊吹1840
- 営業時間：10時～21時
- 定休日：火曜日(水曜になる時もあり)
- TEL：0749・588・8080
- FAX：0749・588・2270
- <http://www.za.ztv.ne.jp/waka-ibuki/>





秋山 清重

太陽生命保険株式会社 総務部



西川 唱子

NPO法人 結びめ



宇留野 元徳

株式会社 湖国フォークスタジオ

よそ者、ばか者、わか者

〈しあわせ「夢を語ろう」〉

高島市朽木麻生の森林公園くつきの森で企業の森林づくりを進めるために東京からやってきた秋山さん、高島で移住支援に従事する彦根市出身の西川さん、そして、昨秋九州から長浜に越してきた宇留野君のよそ者3人が語る町おこし奮闘談です。移り住んだ地域でばか者と呼ばれながらも新風を吹き込むわか者の力について語っていただきました。移り住む事、地域に根ざす事のヒントが満載のトークセッションです。

- 2013年12月
- あふみ舎(長浜市大通寺前秋山邸)



あふみ舎は旧秋山時計店。
おじいさんは時計職人だった



ある日、くつきの森に 連行(?)された

秋山 生命保険会社は、最近ではペーパーレス化が進んできましたが、昔から「紙と人で成り立つ」と言われるくらい事務用紙やパンフレットなど業務上たくさん紙を使ってきました。そこで、CSRの一環として、紙の原料となる森林資源を守る活動をとということで、2006年に栃木県那須塩原市に「太陽生命の森林」を設置し、翌年11月に滋賀県高島市朽木麻生の森林公園くつきの森の一角に「太陽生命くつきの森林」を設置して活動を進めてきました。

私は5年前に総務部に赴任したと同時に、上司から「君、太陽生命の森林、知ってるよね。こんど君に担当してもらおうから」と言い渡されました。そして、前任者の運転する車で、初めてくつきの地に連れて行かれました。

くつきってどこ? 森林ってなに? アウトドアとはまったく縁のなかった私は正直頭の中がまっ白になったことを覚えています。

太陽生命の森林づくりとは

秋山 「太陽生命くつきの森林」は、12・7ヘクタールで東京ドームの約3倍という広さです。ここはかつて「ホトラ山」と呼ばれた里山林です。ホトラとはコナラの幼木のこと、里山に暮らす人はそれを刈って牛舎で牛に踏ませて繊維を砕き、牛糞と混ぜて肥料にしていたそうです。ホトラを採るためにたびたび野焼きも行われていたらしいです。

西川 山沿いの集落にはホトラ山があり、冬になるとみな燃料調達のために柴を刈りに行ったそうです。

秋山 そうなんです。昔はさまざまな形で人々に利用されていた山だったんですが、生活様式の変化にもない手入れもされなくなり放置された森林となっていました。そんな生い立ちの森林をどう整備していったらよいか。

この森林の前身は、朝日新聞社が立ち上げた「朝日の森」です。その中心的人物であった海老沢秀夫さん(現NPO法人麻生里山センター理事)に相談に乗って頂いたところ、各方面の専門家を

巻き込んだ検討チームを作ろうということになりました。

「森林を耕す」 寄り合いプロジェクト

秋山 2011年の春、海老沢さんの呼びかけによって、「森林を耕す」寄り合いプロジェクト」が結成されました。メンバーは、森林の所有者である高島市、森林を管理するNPO法人麻生里山センター、滋賀県立大学の先生ほか森林関係のスペシャリストです。

毎年春先にメンバー全員で森林を歩き、そこで見つけた課題を年間の活動に落とし込みます。

これまでに実施した広葉樹エリアでの鹿防護柵の設置、アカマツ林での表土掻き、トチノキの沢沿いへの移植などはこのプロジェクトの検討を経て実施されたものです。今年から、昔田んぼだった湿地帯にピオトープを整備する活動にも着手しました。

年間の活動では、ピーク時は1日ですべて500人近い社員・家族が集まったこと





M・O・H通信は、わか者、よそ者、ばか者も応援します

もあります。

2013年9月の活動でも、雨の中200人以上が参加し、カップを着て森林に入り作業をしました。

参加者は、けっして無理にやらされているのではなく、皆、森林の気持ちよさを分かっている、この森林に愛着を持ってきているように見えます。大半は近畿圏からの参加ですが、中には東京からやって来る社員もいます。

辻村 森林を求める人が潜在的に多いということですね。

誰よりも、秋山さんが楽しそうに活動されています。やっている人が楽しんでるから皆、安心して参加できるのでは？

秋山 活動中は初対面同士が同じチームになることもあります。あつという間に声をかけ合って作業が始まります。都会では難しい顔で動いていても、森林の中に入るとそうしたことが自然に進みます。これも森林の力です。

社外の指導者の方から、「太陽生命すごいよ。だって社員が自分でやっているし」と言われることがあります。企業のCSRとして資金的援助をし、たまにイベントを開催して、というケースはよくありますが、社員が実際に森林に入ってきて、汗をかいて整備をするというのは珍しいそうです。

太陽生命は今年、創業120周年を迎えました。愚直にコツコツとやるという社風があり、こういう活動に人が集まるのも社風と関係があるのかもしれない。

西川 結びめでは過疎化が進む集落の地域づくりを応援したいと活動しております、麻生の集落でも調査をさせて頂いた



ことがあります。くつきの森にそれだけの人が喜んで集まって来られていることは、地域にとっですごくうれしいのでは？ 集落が元気でいられるように外の力を借りられたらいいですね。

高島市との縁

西川 私は5年前から高島市で結びめという移住支援の団体職員をしています。会社勤めを辞めて、地元に戻ってきた時期で、知り合いの有機農をする農家さんが高島に移住されたので、その農家さんを手伝いたいと高島の中野という集落に週2回くらい通っていました。集落の人と関わりができ、その中で、職員募集のことを聞きました。面接を受けると、仕事内容は、中野で田舎暮らし体験のプログラムを企画・運営するというものでした。採用していただき、とてもありがたかったです。

結びめの活動とは？

西川 結びめは、過疎化が進む高島市

への移住促進を目指し、地域で暮らすことの魅力を発信する団体です。高島市と連携して移住交流促進のための事業を進めています。東京や大阪など都市部への発信も行っていますが、市の職員さんたちと話をすることで、地域側の問題が見えてきました。

実は、高島市へ移住したいという人は多いのですが、入居できる空き家が少ないのです。空き家はたくさんありますが、なかなか貸してもらえません。今まで外向けに高島市をアピールしていました。が、それだけではなく、地域の人に集落の未来を考えてもらい、移住者を迎え入れる意味を分かってもらう必要があると気付きました。

そこから、集落づくりを支援できるような活動を始めています。集落にとっても移住する人にとっても良い移住をしてもらいたい。

そこで、集落の人と都市部の人が直接出会い交流できる機会として、集落作業（草刈りや川掃除など）のお手伝いを体験イベントとして行いました。一緒に作業することで、都市部の人には集落のこ

とを知り人とのつながりを作るきっかけに、集落の人には、「こんな人なら移住してもらいたい」と思えるような機会になればと考えています。

移住はどのように実現するのか

宇留野 私の出身は愛知県豊田市です。滋賀県の大学で建築を学ぶ中で、自分の設計しているものは、箱だけ作っていて中身がないと思っていました。家は生活の基盤になるものなので、建築という箱だけを作るのではなく、地域も含めた生活空間を自分なりに考えたいと思い、大学院を辞めて、福岡県でまちづくりを業務とする会社に入社しました。

出張で福岡県から滋賀に頻繁に来るようになりました。さまざまな立場で地域に関わり、生活している人達と出会い、私もフィールドを持ってまちづくりをしたいと思うようになり、滋賀への移住を決めました。

大学生の頃は、遊ぶために京都や大阪に出っていました。琵琶湖は大学からも家



からも近く、いつも見えていましたが、そこにある景色がいつのまにか当たり前になっていました。就職して出張で滋賀に来る度に、琵琶湖は違う姿を見せてくれました。これまでいろいろな地域に住んできましたが、初めて、生活するならここが良いなと思いました。

辻村 皆、「良いですね」と言う。でも移住までは決めません。なぜ滋賀に移住しようと思ったのですか？

宇留野 仕事で、滋賀の人を紹介する本を作る中でいろんな人と出会ったことが大きいです。私もその輪に入ってからづくりに関わりたいと思い、決めました。

また、昔から「民藝」に興味があり、いつか民藝を体験できる拠点を持ちたいと思っていたので、辻村さんから紹介頂いた町家との出会いはチャンスかなと。

西川 商店街の一等地ですね。高島の作家さんの作品もぜひ置いてください。

宇留野 滋賀は、京都にモノを卸して、作家・白州正子も「滋賀は京都の楽屋裏」と言っくら産業が発達したところ。

手仕事の商品の価格は高く、一般の人

には手が届きにくい。それは、手仕事の価値が理解されにくいということ。だから、作家さんとのづくりのワークショップをしたり、手仕事に触れる機会を作り、手仕事への理解を広めていきたいと思っています。

辻村 宇留野君に家を貸した秋山茂樹さん（近代美術館館長）の熱意もあります。実は、宇留野君の他にもこの家を



旧時計店がショップに变身

貸してほしいという人は数人居られました。中には、店先だけ借りたいという人も居たそうです。しかし、茂樹さんには、お父様が大切に暮らされた家を、地域の祭りなどにも参加して近所の人と一緒にやってくれる人に借りてほしいという思いがありました。

貸したい人と借りたい人の指向性が合ったのでしよう。貸す側の意識も大事です。

西川 それは、集落の人の思いと同じです。

辻村 宇留野君は、入居に際し、企画書を作り所有者や地域の方に見てもらうという手順を踏んでおられる。私の目の前で会社を辞めて移住した人は、この人が初めてだったので、こうやって決断していくのだな、決断するのにそれほどパワーは要らないのだなと思えました。つながりの中で良い条件が出来たら割と簡単に実現したという感じがありました。

西川 私もそうでした。人のつながりが、とんとんと重なるものです。移住は縁ですな。



「あほちゃうか、が風穴を開けた」秋山氏

よそ者の力— アートイベントを通して 見えた事

辻村 長浜は「アートイン長浜」というアートイベントがあります。

西川 商店街でのイベントですね。

宇留野 結びめさんがされている「風と土の交響」はどういう人が来ますか？

西川 自分の生き方を見つめ直している人が多いよ。50代以上の人は、作品暮らしを見るのを楽しみに来られる。20代、30代の人は、今の生き方が何か違うのではないかと思ひ、出展者さんの生き

方を聞きに来たり、移任の相談をした。サポートスタッフにもそういう人が多い。いろいろな関わりや出会いの中で、高島への定任を決めた人も居ます。

辻村 作家の作品を見に行くというだけでは、ないところがミソですね。

西川 アートイベントはたくさんありますが、「風と土の交響」は高島での暮らしと生き方を伝える催しです。人との出会い、交流も大事にしています。

高島では、過疎高齢化が進んでいます。あまり危機感は見えませんが、あまり聞かぬのですが、滋賀は全国比で所得水準が高いそうです。商店街がシャッターで閉まっているも、駐車場には高級車が停まっている。今、困っていない状況の中で、地域に住む人は世間体もあり、未来のために何かやるうと言ひ出せなかつたりする。

一方、外の人は、ここで生き続けなければならぬ縛りが無いから、ばか者になることができる。「風と土の交響」も初年度は大変でした。関係各所に説明に行く、「絶対にできない」と多くの人に言われました。地域の人は、地域で波

風立てられない。だから、やつたらできることも、雪が降ったら、作家が「うん」というはずがない、誰が説得に行くのか、集落に車がたくさん来たらどう説明するのか、と心配事がたくさんある。たいした事ないかもしれないのに、考えるのです。

そんな中で、私たちは外から来た者だからできた。外から来た人はそういう、風を入れる役割を担うのでは。

辻村 それを一つ一つ説明していったのしょう。よくやりましたね。

西川 やるしかなかった(笑)。結びめ内でも、そこまでしなくていい、もっと小さくやるうという意見もありました。何のために、誰のためにやるうとしているのか分からなくなつた時もありました。だけど、一部の作家さんと指導者はずっと信じて味方でいてくれた。現実にはたくさんの方が喜んで頂けるイベントに発展しました。

辻村 高島市全域でやらなければならぬものね。皆の思いがバラバラだったのかしら？

西川 初年度は毎回会議で泣きました。



秋山 できない理由を唱えるエネルギーを「どうやったらやれるか」という議論に回したいものですね。

西川 今では、高島市さんは様々な面で協力してくださり、今年は移住促進の事業と組み合わせで無料バスツアーもしてくれました。他の行政職の方もプライベートで遊びに来てくれます。

辻村 新しい事をする時は、困難さがつきまとうんですね。

西川 地域の人には難しい事でも、外から来た人には出来る事があるのかも。宇留野さんも大変な事もあるかもしれないけど、外の人にしかない視点を持ってがんばってください。

外の人を連れてくる

辻村 秋山さんは、外から人を連れて来て麻生の良さを掘り起こしている。

秋山 数年前の冬、冷たい小雨が降る中、十数人の小規模のグループでカッパを着て作業したことがあります。急斜面につづら折りの道を掘る作業です。

心もとない感じで鍬を振り上げる私を

見て、応援にかけつけてくれた地元の方から「あんたら、あほちゃうか」と言われました。「むしろこんな雨の日に道掘りなんていいひと。でも夜の懇親会で、「あんたたちがこうして来てくれるから、わしらも出てくるんやで」ととてもうれしそうに話してくれました。

我々は年間の決められた日の限られた時間の中で何かを作ると帰りたい。「道がないと森林に入れないから道を作るう」という単純な思いで作ってしまう。でも、そういうきっかけがないと、あそこにはずっと道はできなかつたんじゃないかな。だから

「今年は寒かった。家の改修もやります」宇留野氏㊟「長浜市とも連携したいなあ〜」西川氏㊟



これからも、「あほちゃうか」と可愛がられる存在でいたいと思います。

西川 その活動に参加される人と、地域の人に関われる取組みができないかな。

麻生には独居のお年寄りが多いです。あるおばあちゃんは「もうここは終わりや」と言わはる。それを聞いた時に、もしかしら集落は消えるかもしれないが、最後までおばあちゃんたちが幸せに生きてほしいなと思いました。

「ここは終わりや」と言うおばあちゃん、麻生を楽しみに来られる都会の人をつなげられたら良いのでは。

秋山 活動日に地域の人にも来てもらい、里山料理なんか出してもらえたら楽しいでしょうね。おばあちゃんに子どもたちの相手をしてもらったりして。

辻村 ママにはゆっくり休んでもらう。

西川 それやりましょー！世代間の交流。麻生のおばあちゃんたちにも幸せを感じてもらいたい。

秋山 外から来て作業をして帰るだけでなく、もっと地元の方々と関わる機会が持てればと思っています。「どんぐりプロジェクト」で朽木東小学校の子ども

たちとのコラボが進んでいるので、ぜひ今度は朽木のおばあちゃんたちの知恵をお借りしたいです。

西川 自分の役割があり、人の役に立てた時が一番幸せ。だから、その機会を作ってあげることが大事。「あほちゃうか」と言われるということは、「おっしや、俺の出番や」ということです。

わか者もお年寄りと関わる機会が少ないから、世代間の交流ができればいいな。

夢を語ってください

宇留野 ものづくりの事ですが、手仕事のものづくりが厳しい状況にあるのは今のニーズに合わなくなってきたという事もあると思う。だけど、手仕事の技術は、応用できると思うので、地域の人や作家さんに信頼して頂ける関係性を築いていき、デザインをプロデュースできるようにになりたい。素晴らしい技術を持った職人さんと一緒に、使い方の提案からデザインまでものづくりに関わりたいです。

それから、長浜に年間何百万人も来る観光客の方が2、3時間滞在して帰られるのはもったいない。私の町家に来てくださった方に対して、別の地域へ行ってみようと思えるような仕掛けを持ったプラットフォームを作っていきたいと思っています。

辻村 長浜市には、市街地活性化委員会などがあり、旧一市六町の連携に前向きです。それをよそ者のあなたがやってくれるといい。課題は長浜市の周遊観光です。

西川 私は、地域の人と話をして、地域の人の声を聞いて、どんな未来にしたいか一緒に考えたい。

地に足の付いた活動を丁寧に行おうと思うと時間が必要です。「風と土の交響」にしても、作家、スタッフ間のコミュニケーションがすごく大切。そこがもともと時間と手間がかかり、お金が生まれにくいところです。

秋山 この森林は昔、里山林として人々の暮らしに大きく関わっていた。そうした歴史はとても感慨深いものがあります。そして時代が変わったいま、私たち





わたしたちは、人と遊びが大好きです

恵み豊かな 里山林づくり 秋山清重

●あぎやまきよしげ＝太陽生命保険㈱がCSRの一環として取り組む森林づくりの担当を務める。くつぎの森で開催される「山のめぐみフォーラム」ではM・O・H通信と共に協賛。年に数回社員による整備活動を実施するほか、地元朽木東小学校の子どもたちとどんぐりから森林を育てる「どんぐりプロジェクト」が進行中。

がこの森林に出合った。これも何かのご縁。新しい形の森林との関わり方をよく考えながら森林づくりを進めていきたいです。

最近、活動の参加者を募集するとき、「恵み豊かな里山林づくり」というタイトルを掲げています。現代における最大の恵みは「癒し」だと思います。私が森林の担当になってからずっとお世話になっている指導者の方から「生命の根源は森林にあり、私たちは森林に生かされている」ということを教え続けられてき

NPO法人 結びめ 西川唱子

●にしかわしよつこ＝1998年から移住支援の団体「結びめ職員」として高島市を拠点に活動。近江環人でM・O・H通信編集長と知り合う。結びめ主催のアートイベント「風と土の交響」の立ち上げに尽力。高島市で移住促進に取り組み。

ました。森林に入ると理屈抜きに気持ちがいい。湧き上がってくるエネルギーを体で感じる事ができる。積極的に森林を整備することを通じて、たくさんの方にそうした恵みを受受してもらいたい。

「太陽生命の森林は、とっても気持ちのいいところらしい」「地元の人たちと楽しく過ごして元気が出た」と口々に広がっていくようになることが夢ですね。
西川「太陽と生命の森林」、すてきです。

あしみ金 宇留野え穂

●うるのげんとく＝滋賀県立大学の卒業生、九州にある地域コンサルティング会社に勤務中、仕事で滋賀をたびたび訪問、移住を考えていた。長浜商店街にある秋山時計店のおじいさんが亡くなり、その息子さんから「空き家をどうしようか考えている」と相談されたM・O・H通信編集長、滋賀で家がないかと探しており、宇留野君を紹介したのが事の起り。株式会社湖国フオークスタジオを主宰。



⑤寄稿 〈しあわせ「夢を語ろう」〉

「母なる湖 琵琶湖」

白根 拓実

能登川南小学校五年宙組

2013年6月、富士通株式会社主催による小学生対象の記者講座が能登川南小学校で開催され、約130名の5年生が受講しました。このほど、その成果作品が編集室に届きました。



フローティングスクール「湖の子」から琵琶湖の島を観察



子どもまち記者講座



山路川調査



フローティングスクール船上での水質調査

ぼく達は、この一年間水環境の学習をしてきました。六月、九月と二回、ぼく達の小学校の近くの流れる身近な川、山路川を調査しました。予想していたよりも川はきれいで、スナヤツメという、美しい水にか住まない魚も見つけられました。ぼくは、六月の初めに山路川へホタルの観察会にも行きました。ホタルのえさになるカワニナも、きれいな水にか住めない貝です。川のゲンジ、田のヘイケ、山の

ヒメといわれ、これも、美しい川にしか住めないといわれるゲンジボタルが、たくさん飛んでいました。そんなホタルが、こんなに身近にいるなんて、ぼく達は幸せだし、ほめる事だと思いました。

二学期に入り、近くの猪子山から伊庭内湖を見ました。伊庭内湖は、山路川が流れこみ、琵琶湖につながる東部浄水溝の手前の内湖です。十月には、西の湖で淡水真珠の養殖よくをされている、齊木さんのお話をうかがいました。実物の淡水真珠はとても美しかったです。びわパールと呼ばれ、高い品質を持っているそうです。この美しい淡水真珠を作るイケチヨウガイは、もともと琵琶湖固有の貝で、水質浄化に役立っているということです。イケチヨウガイは、第一に、淡水二枚貝の中でも、貝はばが二十三〜二十五センチメートルと最大級であり、貝一個での水質浄化率が高いこと、第二に平均寿命が十年以上、最高四十年と長生きすることから、長期的な管理が出来て、い持管理しやすいこと、第三に、美しい淡水真珠の母貝であることから、真珠養殖よくをすすめることで、水質浄化も出来ること



いう一石二鳥の特長を持っているので、水質浄化の目的で、注目されていることも教えていただきました。

ぼくは、琵琶湖の産業が活発化して、水も美しくなり、滋賀県を自まん出来る事が増えるなら、もっと「びわパール」が、たくさん作られて、世界中に売れていくと良いなと思います。ぼくも、大きくなったら、お母さんにプレゼントしてあげたいなあと思います。

水の勉強をしていたら、ぼく達の住んでいる東近江市が、里山、里地、里湖が一つの水系でつながった、人口、面積ともに、日本のほぼ千分の一の市であることもわかりました。昔は、「カワト」とよばれる、川に続く石段が各家にあり、川と住んでいる人の生活が密接につながっていたことを知ってびっくりしました。川が水道のかわりに利用されたり、田んぼの道具や収かく物を運ぶ通路としても利用されていたということは、今のぼく達の生活からは、想像できないことです。が、「だから、川や琵琶湖が、ぼく達には、なくてはならないものなんだ。」と思いました。

伊庭内湖では、渡り鳥を保護する活動や、ヨシ刈りもされています。ヨシもイケチヨウガイと同じように、水を浄化する力があるそうです。水中の窒素やリンを養分として吸い取ってくれるので、刈り取れば赤潮、アオコの発生につながる窒素やリンを水の外へ出すことが出来ます。また、ヨシの水中の茎につく微生物や群生の土の中の微生物によって水の汚れを分解してくれるし、水の流れを弱くし、水の汚れを堆積できるので、汚れを取り出しやすくなるのだそうです。

ぼく達は、十一月にフローティングスクールに参加して、琵琶湖の展望活動をし、琵琶湖で見られる水鳥や水草、プランクトンについても学びました。フローティングスクールまでに学習してきた琵琶湖に住む生物のこと、そしてその生物がもたらしてくれる恵みや水質を浄化してくれることを、実際に琵琶湖に浮かぶ船の上で一泊することで、体感することが出来ました。また、他の小学校の人と話すことで、ぼく達子どもも、みんな力を合わせれば、琵琶湖を守れそうな気がしました。

フローティングスクール後、一年間の学習の発表の場として、五年生で、能登川南小環境フォーラムを開き、一人ずつテーマを決めて発表しました。お互いの考えをわかりあえることが出来たし、環境について深く考える良い機会になりました。

今年も、この水環境の学習に合わせて、記事の書き方、写真のとり方、インタビューの仕方についても学びました。そして、みんなの前で発表することで、人に伝える大切さも学びました。

ぼくは、この一年間の水環境の学習で、琵琶湖は、多くの生物を育て、ぼく達の生活を支えてくれる、「母なる湖」であることを実感できました。ぼくは、自分が水を守るために出来ることとして、生活の中で、出来るだけ汚い水を流さないようにし、川や琵琶湖を守りたいと思います。そして、この学習で学んだこと、気づいたこと、感じたことを、これから琵琶湖や滋賀県の産業、ぼく達の生活を守っていくことにつなげていきたいと思っています。



⑥ M・O・Hレポートへしあわせ「夢を語る」く

サンショウウオが棲む 森の傍らで製造業



佐々木 健

株式会社 ダイフク 執行役員・滋賀事業所長

日野町の丘陵地帯に広大な敷地をもつ物流システムメーカー・ダイフク。近年メガソーラーの設置や社内外でのエコプロジェクトをはじめとするCSR活動に力を入れてきた中で、敷地内の環境をいかに保全していくのかという新たな課題がみえてきた。

■2013年12月17日

■ダイフク滋賀事業所（滋賀蒲生郡日野町）



カスミサンショウウオ。かわいい



ひっそりと生息していた
希少な野生生物

「運ぶ」・「仕分ける」・「保管する」モノを動かす技術で、生産・流通・サービスの現場における物流の合理化を図る「マテリアルハンドリング（略してマテハン）」の分野で、世界1・2位の売上高を誇る「ダイフク」が、滋賀県日野町で生産をスタートしてから約40年。自動車の組立ラインや小売業界の配送センターの配送システムなど、世界のさまざまな業界で自動化を牽引してきた。

この滋賀事業所を案内され驚いたのが、製造現場の音がまったく聞こえてこないことだ。11棟の工場が豊かな緑に囲まれてゆったりと建っており、雑木林に囲まれたしゃくなげ池を泳ぐ鴨やカイツブリを眺めていると、メーカーの敷地であることを忘れてしまう。ほかでは見ることの出来ないマテハン総合展示場の「日に新た館」に加え、2013年11月からは県下最大の発電容量4・4MWのメガソーラーが稼働している。

そんなダイフクの新たなニュースは最

新技術ではなく、自然の生きものだった。近年の専門家の調査で、ハヤブサやカスミサンショウウオなど絶滅が危惧される貴重な生きものが多数生息していることが分かった。ハヤブサは、事業所のシンボルにもなっている高層研究棟のDAIFUKUロゴの「K」を拠点にしており、ここから獲物を狙っているらしい。

「部下の谷口と一緒に昼休みに社内を歩いていて、よくKのところではハヤブサを見かけます。『あ、今日もおるなあ』ってね。あそこの場所が好きみたいですな」。

案内してくださる横地富重さんもハヤブサやサンショウウオの話になるとニコニコ笑顔に。

「実は、私はまだハヤブサをちゃんと見たことはないんですが、Kの真下に糞がいっぱいあるので、そこによく留まっていることはわかっています」と苦笑いしながら、滋賀事業所長の佐々木健さんはダイフクのCSR（社会的責任活動）の現状について説明してくださった。

広大な敷地は静か。鳥のさえずりも聞こえる。県下に誇るメガソーラー





①



③



②



⑥



⑤



④

- ① 貯水池の「しゃくなげ池」
- ② 事業所ジオラマと生きもの紹介パネル
- ③ 自動車組立ラインの展示
- ④ マツ林に生息するハルゼミの抜け殻
- ⑤ 地中の菌と共生するキンラン
- ⑥ ハヤブサお気に入りの場所
- ⑦ 従業員有志による自然観察会



⑦



グローバルに 環境経営を推進

「そういう貴重な生物がいると聞いて『環境保全をされていてすばらしい』と言われることがあるのですが、正しく言うと『棲んでいてくれた』『よくぞ絶滅せずにいてくれた』なんですよ(笑)。われわれが何かしたかと言うと、積極的に何かをしたわけではないんです。ただ、そういうものが見つかったというのは喜びですから、絶やさないと新しい社会的責任ができました」。

いままで環境保全や緑化のためと思ってやってきたことの中にも、手を加えて自然にとってはマイナスだったこともあるかもしれない。これから生物多様性についてどう対応していくのか、企業としては喜び半分、戸惑い半分というのが正直なところと佐々木さんは言う。

もともと滋賀事業所は「自然に恵まれた環境で、人間性豊かな生産性の高い工場を持ちたい」というインダストリアルパーク構想のもと開設した。

「電柱は立てないとか、無駄に木を切る

なとか、緑化に配慮しようというのは不文律ですつとやってきました。除草剤も一切使ったことはありません」。

森の中にある工場という立地と、自然を活かした再生可能エネルギーとは理念に矛盾がなく、メガソーラーの設置はすんなり進んだ。国の買取制度も力強い後押しになった。

これに対して、本業と何ら関わりがなく利益を生みだしそうもない生物多様性についてはどうだろう？

生き物のにぎわう広大な敷地とメガソーラーを、地域の子どもや大人向けに見学コースとする案や要望はすでにできている。ただ製造現場であるため、見学者の安全確保という問題に対していろいろ知恵を絞っているのが現状のようだ。

「環境価値と企業価値がどうつながるのか、わかったようでわからない。いわゆる財務的な成果と環境価値の向上は見方によつたら相反するの事実です。徐々にはあるけれども、環境融資や環境格付けという動きが始まっている。そういう仕組みや制度で企業を

後ろから押ししていたけると、単なる社会的責任以外に実利的な側面が出てくる。そのようなものが社会全体を動かすのかなと思っています」。

滋賀事業所内で生物多様性と再生可能エネルギーに取り組んできたダイフク。次は、海外拠点での環境経営をどう展開していくのが課題だと佐々木さんは話す。

「世界中をネットワークしながら環境経営を同時に進めて、マテハンメーカーとして初めてグローバルに環境経営を成功させた企業になりたいというのが夢です」。

虚心地懐 佐々木 健

● ささき けんい
1954年、千葉県船橋市生まれ。1989年ダイフク入社。生産技術を中心に工場長、生産統轄生産技術本部長などを歴任、2013年より現職。趣味はゴルフ、音楽鑑賞。



⑦ M・O・Hレポートへしあわせ「夢を語る」<

おもしろおかしく！ みんなで楽しむ地産地消



山本 和也

株式会社ホリバコミュニティ 取締役統括部長

京都に本社を置く大手分析機器メーカー堀場製作所は、社員食堂での地産地消にも先進的に取り組み、次々にユニークなアイデアを打ちだしている。地産地消フェアや特産品マルシェ、さらにはオリジナル焼酎や農園まで!? その原動力はどこにあるのかを探るため、本社の社員食堂を訪ねた。

■2013年12月13日

■堀場製作所本社 社員食堂（京都市南区）



地産地消を野菜で説明!



社是「おもしろおかしく」

堀場製作所を訪ねたのは、ちょうど昼食時。早めにお昼を済ませて談笑しながら事務所へ戻る人たち。その中に、手にビニール袋を提げた人が何人もいる。あつちでもこつちでも、袋から青々とした大根の葉っぱや青菜がはみ出している。それも、ふだん野菜を買わなそうないイメージの男性社員も結構うれしそうに持っていたりする。会社の昼休みに大根？

実はこれ、堀場製作所の社員食堂で年に1回行われる「地産地消フェア」での一コマ。1週間という期間限定で「地産地消フェア」と銘打って、京都産野菜と舞鶴産の海産物を使ったメニューを日替わりで複数用意し、同時に食堂内で京都産の野菜や海産物の展示即売が行われている。即売を楽しみにしている「常連さん」は年齢性別を問わず多いようで、山積みの野菜が見ている間にどんどん減っていく。料理の選択肢は通常メニュー3品に加えて、地産地消フェアとしてこの日は「舞鶴産小鯛と南山城産

しいたけ入り天井」「HORIBAファーム産 大根のおでん」、日本海で冬に採れる海藻を使った「舞鶴産あかもくそば」の3品。たっぷりダシを煮含めた大根の甘み、新鮮な小鯛を天井でいただく贅沢さ！ 社員1300人を対象にした食堂は想像以上に充実していた。

できる限り地産地消で

堀場製作所が社員食堂での地産地消に取り組み始めたのは数年前。事業所としてはいち早く、2008年に京都府の「たんとおあがり京都府産」の施設認定章を受けている。「たんとおあがり京都府産」は地産地消の啓発・推進を目的に、病院・福祉施設・企業の社員食堂・学食等を対象に2006年にスタートした制度だ。

堀場製作所本社の社員食堂で使われている米は丹波産のキヌヒカリ。その他、安定的に供給される青ネギとモヤシも100%京都府産だ。野菜は季節や天候によって価格の変動が大きいので、社員食堂で使う野菜すべてを京都府産

だけで賄うわけにはいかない。そこで、納入業者に「可能な限り」京都産の旬の野菜を使うように依頼。その結果、京都の白菜や大根・キャベツといった基本的な野菜のほか、ときには「聖護院かぶらのえびあんかけ」など、ちょっと贅沢感のある旬の京野菜メニューも登場するそうだ。こうした地産地消の方針は、京都本社だけでなく熊本県阿蘇にある工場の食堂でも取り入れている。

大盛況のマルシェ

地産地消の取り組み方として、このあたりまでは一般的なレベルと言えるだろう。社内でさらに独自に進化させているのが堀場製作所のユニークなところだ。

その一つが「西原村マルシェ」。年に2回、阿蘇工場がある熊本県西原村の特産品を京都本社で社員向けに展示即売している。農業と畜産が盛んな西原村から新鮮な野菜や果物・加工品を直送し、西原村から村長や生産者も駆けつけて特価で販売する催しは毎回大いに盛りあがるそうだ。阿蘇工場の地元・





「これ、おいしそう。どうやって料理するの？」男女問わず野菜に関心が高まる

西原村は会社にとっても地元、本社をあげて応援したいという理念はもちろんのこと、トラック便が排出するCO₂についてもしっかりと考えられている。本社と阿蘇工場を結ぶ社内物流システムを利用して、阿蘇工場に納品した後、積み荷がカラの状態で京都本社に戻るトラックに野菜を積みこんでいるので、マルシェのために余分なCO₂は出していないのだ。

マルシェの日の昼休みは、買い物籠を持った社員で本社中庭はぎっしり。夕方には、阿蘇の赤牛のたたくと馬刺しの握り寿司セットの超特価での販売もあって、会場は活気いっぱい。地産地消やCO₂排出量抑制といった崇高な目標はもちろんのこと、何よりもまずみんなと一緒に楽しめるイベントとして成立している点に注目したい。

さらに、西原村の農作物を有効利用しようという発想から、2012年には社内販売用にオリジナルの焼酎「あそ村咲」が誕生した。西原村企画商工課の全面協力で西原村の特産品である紫芋の中で商品価値がつかず捨てられている





①「今日のおすすめは大根」季節の味を大切に ②おでん定食。大根はブルーベリーファームJOY&FUNで収穫
③あかもくそば。とろみがあってしっかりした味わい ④「出汁に自信あります」とシェフ

ついに農園スタート！

「『おもしろ おかしく』が堀場製作所の社是なんです。自分が楽しいこと・好きなことをやっているときは寝食を忘れて没頭して、それでいて疲れない。ものづくりや人生はそういうものなのではないかという創業者の堀場雅夫の考えから出た言葉です」。

多量のクス芋を、小ロットに対応してくれる鹿児島島の醸造元に依頼して、西原村のクス芋と米麴で造ったという希少なものを。
「オリジナルの焼酎まで造ってしまつて、やりすぎといわれるかなと思つたんですが意外と社内に好評でよかつたです」とホリバコミュニティ取締役の山本和也さんはやわらかな笑顔で話してくれた。ホリバコミュニティはHORI B Aグループの福利厚生を担当する会社で、社員食堂の運営も行っている。柔軟な発想で次々におもしろい企画を生みだしている源は、ホリバコミュニティのみなさんの笑顔にあるのでは…という気がしてきた。



理念と楽しさのバランスをうまくとった企画を通して、農作物や地産地消にまったく関心がない人も知らず知らずのうちに巻きこんでいく地産地消の取り組み。その背景には「おもしろ、おかしく」の精神があると山本さんから聞いて、深く納得した。

そんな堀場製作所の地産地消活動は2012年4月、さらに新たな一歩を踏みだした。高島市安曇川の比良山系の中腹で始めた農園「HORIBA Blueberry Farm Joy & Fun」。耕作放棄地を借り受けて、540本のブルーベリーの苗木を植え、環境にできる限り負荷をかけない無農薬有機栽培で2015年の初収穫を目指して大切に育成中とのこと。「ブルーベリーフィールズ紀伊國屋ソラノネ」の協力のもと、ブルーベリーのほか、ジャガイモやサツマイモ・大根・金胡麻などの野菜も栽培して、社員が家族ぐるみで植え付けや収穫を楽しんだり、新入社員研修やボランティアでの農作業体験の場として活用している。「農作業に参加した人はみなさん、最後



「笑顔がね、いいんですよ」山本氏

は満面の笑みで『来てよかった!』と言ってくれる。その笑顔がね、本当にいいんですよ! 最近、社員同士が社内外でコミュニケーションをとる場が少なくなってきたので、そういう場としても貴重だと感じています」。

もちろん農作業を楽しむだけが目的ではない。農園で収穫したジャガイモやサツマイモ・大根は社員食堂の食材として使われるほか社内で販売され、ごく一部とはいえ自給自足していることになる。

初めての年に収穫したサツマイモが天候のおかげであまりにも美味しかったので、翌年の平均的なサツマイモが味

気なく感じられたと山本さんはちょっと残念そうに話してくれた。しかし、採れたての新鮮な野菜の美味しさを頭ではなく自分の舌で知っていくことこそが、食材に対する意識を底上げしていくはず。

「社員食堂での地産地消の取り組みは、むずかしいことはさておき、まず『美味しいものが食べたい!』なんですよ」と山本さんは朗らかに笑う。

本業が農業とまったく関わりのない会社内で進む地産地消の活動の原点は、ごくシンプルな「美味しい!」という体験にあるようだ。

活き活き生きる 山本和也

●やまもとかずや1958年滋賀県生まれ。1977年、株式会社堀場製作所入社。2005年3月より同グループの総合福利厚生会社である株式会社ホリバコミュニケーション出向。同社取締役統括部長。



⑧ M・O・Hレポート
 〈しあわせ「夢を語ろう」〉



淡海こどもエコクラブ活動交流会にて奨励賞を受賞。中野氏は後列⑥

輝け!『アイキッズ』

中野 隆弘

びわ湖エコアイデア倶楽部 アイキッズ サポーター

● 会場に入ると幼児から中学生まで、たくさん子どもたちで賑わっていた。滋賀県が主催する「淡海こどもエコクラブ活動交流会」が開催され、九つの団体が活動の発表と意見交換を行い、審査員により滋賀県知事大賞、奨励賞、活動賞が表彰される。アイキッズのメンバーたちは、少し緊張した面持ちで発表に臨んでいた。交流会の後、サポーターの中野さんにお話を伺った。

■2013年12月8日

■琵琶湖博物館（草津市下物町）



受賞続々

滋賀県草津市の小、中学生からなる子どもエコクラブ「アイキッズ」は、びわ湖をフィールドにいろいろな環境学習に取り組んでいる。メンバーは小学4〜6年が中心だが、小学校を卒業してもサポーターとして活動に関わる子もいる。

昨年力を注いだ、湖魚を使った伝統食作りなどの活動が評価され、11月に「生物多様性アクション大賞2013」大賞と「たべよう部門」優秀賞、「第6回全国いい川・いい川づくりワークショップ」入賞。そしてこの日「淡海こどもエコクラブ活動交流会」奨励賞に輝いた。

すごいぞ！アイキッズ

アイキッズのねらいは、活動を通してびわ湖の恵みをいただき、豊かなびわ湖を体感すること、いろいろなひとに出会い、びわ湖に対する思いを聞くこと、豊かなびわ湖を守っていくためにできる事を考え行動すること。子ども主体性や世代間交流、体験活動の充実さを大切にしている。

昨年の活動テーマは「食」。びわ湖で採れたニゴロブナやビワマスを使ったなれずしや佃煮、アミノイオご飯、日野菜漬けなどの、滋賀の伝統食作りにチャレンジしてきた。おにぎり作りでは有機栽培の近江米をびわ湖の深層水で炊くというこだわり！またホンモロコの養殖水田で作業を手伝うなど、さまざまな現場で「食」を通じた体験をしてきた。

伝統食を指導したのは、弊誌38号の対談に登場した「滋賀の食事文化研究会」の堀越昌子さん。また「びわ湖の水」と地域の環境を守る会「代表で漁師の松沢松治さんからもお話を聞くなど、人とのつながりも大切にしている。

「ビワマスの刺身とか、滋賀にこんなにおいしい伝統食があったんだと気付いた。大切にしていきたい」と子どもたち。活動を通して「水のつながり」、命のつながり、人のつながり」を学んでいく。実際に見て、触れて、聞いて、感じる体験は大きな財産となる。

サポーターのおはなし

アイキッズが誕生したのは2008年。

パナソニック草津工場が「環境宣言〜エコアイディア工場びわ湖〜」を発表したのをきっかけに従業員有志が集まり発足した、びわ湖エコアイディア倶楽部の取り組みとしてスタート。

「当時みんなやる気満々だけど、活動の運営には初心者ばかりで、実際どうやるの？ みたいな感じ(笑)地元小学校でエコクラブをされていた中村先生に出会い、賛同してくださったことで初めて本格的に動き始めました」と語るのは、アイキッズサポーターの中野さん。子どもたちから「たかさん」の愛称で慕われている。

アイキッズのサポーターは、子どもたちにすぐに答えを出すことをしない。

あるとき、湖魚が田んぼに遡上して産卵・成育する「ゆりかこ水田」のビデオを観て、子どもたちから、やりたい！と声が上がった。子どもたちは自分たちで計画を立て、田んぼを作ることになったのだが、その場所はびわ湖から遠く離れた丘の上！中野さんたち大人はできないだろうと思いつつも、ダンブカーを手配し、土を用意し、周りの人の協力も



1

- ① エリに入った魚は？
「お、いるいる♪」
- ② 伝統野菜・日野菜の
収穫
- ③ 日野菜加工場の見学
- ④ 魚、いっぱいどれた～
- ⑤ ホンモロコ養殖水田で
奮闘



4



2



5



3





①



③



②

①「魚はね、こうやって…」堀越先生[㊦]のレクチャーにみんな興味津々 ②おいしくな〜れ ③なれずし、いもつぶし、七草粥の草津膳。滋賀の恵みを食す

ありながら田んぼを作り上げた。2回の稲作を経たが「ゆりかご水田」は実現しなかった。しかし、この経験が子どもたちにとって「食」を考えるきっかけになったという。失敗という経験から食にまっすぐ向き合う姿勢が生まれた。

🌻 子どもたちが学ぶエピソード

なれずし作りでは、子どもたち自ら魚をさばき、ご飯を詰めて時間をかけて作っていく。なれずしは酸味がきつくと、子どもの味覚には合わないことが多いが、それでも自分たちが作ったものに必ず箸をつけるそうだ。

発表会で「なれずしは美味しかった？」という審査員からの質問に、「アミノオご飯がおいしかった。なれずしはちよつと苦手…」と素直な意見も。

「みんな一応食べるけど、あまりおいしくないと言う。それでも大人は嬉しそうに食べていて(笑)子どもが食べるにはハードルが高いかもしれませんが、彼らを感じ取ってくれることは、作ってくれた人への感謝やいただいた命への感謝なのかなと思います」と中野さん。





「恵みに感謝」なれずパーティにて、大人も子どももニコニコ

子どもたちが「学ぶ」
「エピソード」

いろんな人とのつながりの中で、子どもたちはすごく素直な質問をする。「ブラックバスとかブルーギルの外来魚って、びわ湖にいたら困る魚やけど、でも大切な命やろう?」

中野さんは「その答えは大人が見つけていかないと」と話す。子どもたちの素直な感想・意見に大人が学ぶことも多いようだ。だからこそ、子どもたちに「教える」のではなく「伝える」。「現状はこうで、君たちの時代にはこうなっていくと思うけど、みんなどう思う?」と自ら考えるしかけづくりをしているのだ。

もっと発信してみたい!

「もつともつと、いろんな団体の人たちに自分たちが学んだことを発信してきたい」と夢を語る。

漁や伝統食を伝えてくれる先生の話、子どもたちが体験したいろんなできごと…たくさんのご経験を吸収するのに、ほんの一部しか外部に発信できていないことがもったいないと中野さんは感じている。そのために、ホームページの活用や他のエコクラブなどとの交流を積極的にやりたいそうだ。

来年度の活動をどうするか? いつも年度はじめに子どもたちと1年を振り返り、どんな活動をやっていくか話し合いで決める。アイキッズで学んだこと

が、これからの人生にどんな影響を与えるのか楽しみだ。彼らの未来に期待したい。



びわ湖エコアイデアクラブ
倶楽部

中野隆弘

●なかのたかひろは1969年大津市生まれ。びわ湖エコアイデア倶楽部アイキッズサポーター。ボーイスカウト指導者としても活動。大切にしているもの、おかげさまの気持ち。

●アイキッズ

エコアイデアキッズびわ湖2008年誕生。愛称アイキッズ。合言葉は『あいさつ』『チャレンジ』『感謝』。

拠点所在地：滋賀県草津市野路東
<http://blog.canpan.info/kids/>

photo essay
フォト エッセイ

春を迎える

辻村 耕司
フォトグラファー

木々が芽吹き、
琵琶湖に柔らかな風が吹きます
華やかな祭りが各地で催されます
歳神様を迎える正月
春には五穀豊饒を願う
巡る歳月





今津の夫婦桜 エドヒガン 高島市







5



7

- ① 日野祭り (日野町)
- ② 沖島の春 (近江八幡市)
- ③ 竹馬まつり (高島市)
- ④ 川上祭 (高島市)
- ⑤ 馬路石邊神社の豊年踊り (守山市)
- ⑦ 左義長 (近江八幡市)

辻花舞

● つじむら こうじ=1957年滋賀県生まれ。膳所高校卒、関西学院大学中退後、独学で写真の道へ。『湖国再発見』をテーマに滋賀の風物を取り続ける。出版社や企業からの依頼が多く、写真掲載出版物は多数。



6

⑨ 寄稿へしあわせ「夢を語ろう」

あの人はいま… エコその先へー

時代潮流はエシカルスタイル



岡 靖敏

一般社団法人あだーじょ(adagio)代表理事

2008年3月号で取材した岡靖敏氏から連絡があった。
「エシカルをするんですよ!」「エシカル?」って何??
環境文化が普通になる時代が、今らしい。



循環社会づくりに向けた
最終章 —意識変革へ—

去る22年前、1992年ブラジル・リオデジャネイロで開かれた人類史上最大規模の国連環境会議「地球サミット」で世界が合意した理念「持続可能な発展」と21世紀の行動計画「アジェンダ21」を基調にパラダイムの転換が始まりました。この持続可能な発展をキーワードに循環社会づくりに向けた政治・制度や経済・科学技術、そして人々の意識変革に向けた取り組みが進められています。

いま、私たち一人ひとりの意識のなかで地球環境や社会貢献など、広範な社会問題や社会責任に配慮したモノやサービスを積極的に消費するエシカルな行動へ、価値観の変化「ス・ペンド・シフト（無節操な消費から節度ある希望の消費へ）」が起こっています。エシカルは1990年代にイギリスで発達した概念で、エシカルコンシューマリズムが広く知られています。日本ではフェアトレードなどの取り組みが始まり、1998年



環境文化フォーラム「21世紀の消費者像を探る」—暮らし、環境、市民社会— (2000.7.22)

から、私たちが主宰した環境文化フォーラムの中で「21世紀はエシカルコンシューマーの時代」を提唱してきました。

2009年にはイギリスのエシカル消費の市場規模は5兆6000億円と推定され、環境保護や社会貢献機運の高まりで、世界のエシカル消費市場は拡大しているとされます。また、内閣府の意識調査結果(2010年)では、日本人の65%は「日ごろ、社会の一員として何か社会のために役立ちたい」と考えています。

震災後強まってきた意識や
ライフスタイル

2011年の東日本大震災後、ボランティア活動を組み込んだ旅行商品や、義援金付き預貯金などのエシカル商品が次々と登場してきました。そして企業による倫理的購入・CSR調達研究会で原則とガイドラインづくりが進められています。このようにリーマンショック+3・11福島、ISO26000/SR発行以降、成長・カネは目的ではなく、



手段」という新しい気づきが生まれ、新たな共同体と持続可能な希望ある消費へ価値観の変化、スベンド・シフトの意味を考えるようになってきています。

2008年のリーマンショック後、消費行動が見直され、エシカル消費が注目されるようになりました。女性誌などはこぞって「おしゃれで社会貢献」といった特集を組み、フェアトレードの素材を使った商品や、売り上げの一部が寄付として途上国での学校建設に回るブランドなどを紹介。若者たちの間では、「エシカル消費はおしゃれで、かっこいい」との見方が芽生えています。

エシカルスタイル 人と自然と社会にやさしい暮らし方

こうした社会や時代の流れから、私たちの生活のあり方を考え、真に豊かな社会への道をさぐる、人と自然が調和したデザインの中にこれからの暮らしのヒントを探す「エシカルスタイル」をデザインしていきます。それは、図表1のようなエシカルスタイル（環境や社会、

図表1 エシカルスタイル（環境や社会、人に配慮した消費行動）の視点

チェック評価項目	商品名, 製造元, 企業系列	消費行動
① どこから		
② どのようにして来ているか		
③ 人権や労働条件は		
④ 安全性に問題はないか		
⑤ 環境面で問題はないか		
⑥ 軍事・平和面で問題はないか		
⑦ これを買うことで利益を得るのは誰か		
⑧ 苦しむのは誰か		
⑨ 無責任なマーケティングを行っていないか		
⑩ 私は本当にこれを必要としているのか		
⑪ これを買うことで社会的に役立つのか		

(岡・1999環境文化フォーラム)

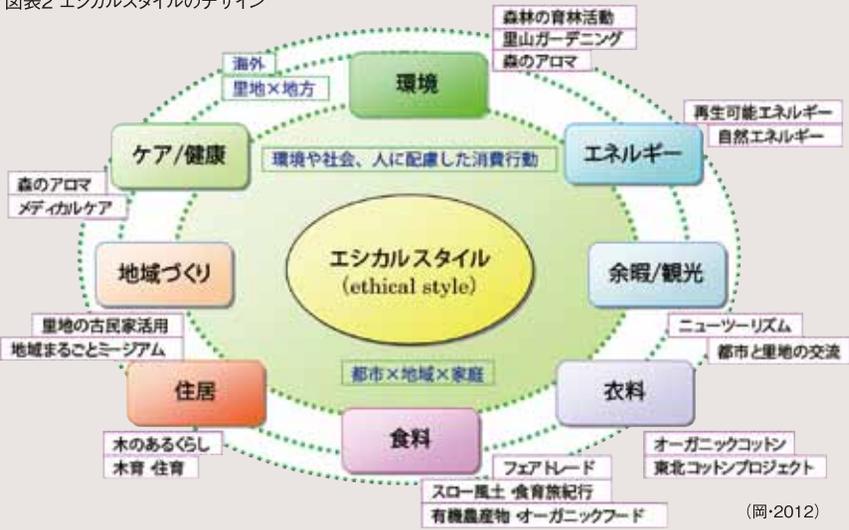
りだす人と、それを使う生活者との対話を通して、生活の質を考え、いつの時代も永遠のテーマである「新しい生活文化とは何か？」を一緒に考えてみたいと思っています。

いま、当団体ではアサヒ・ファミリー・ニュース社とのコラボで、図表2のようなエシカルデザインによるソーシャル事業「エシカルスタイル」に取組んでいます。その中核になる「エシカルカレッジ」を開講しました。講座の一つは、ふるさとつながりたいたい都市と里地との交流事業で、これから人口大交流時代にあつて都市と里地の人の往来を活性化させ、都市と地域が連携し、里地里山の資源を生かした都市の方々との交流を実施します。

なかでも、食をテーマにした「スロー風土な豊穡の旅―奥丹波／淡海食育紀行」では、日本の風土で培われた食文化を再発見する小さな旅。いつの間にか食べなくなったり、作らなくなったり、獲れなくなってしまう食材や料理があります。その土地で脈々と伝えられてきた、地域で収穫された旬の食材を使った



図表2 エシカルスタイルのデザイン



エシカル・カレッジのご案内

エシカル・カレッジ チラン



大いに盛り上がった里山ガーデニング



丹波市ニューツーリズム
交流大会

伝統的な料理術を学び、味わいながら、地元の方々との楽しい食事の語らいを体験するエンカルトゥリズムです。期せずして和食がユネスコ無形文化遺産に登録され世界的に注目されるようになりました。また、今年には「女子高校野球応援プロジェクト」や「東北コットンプロジェクト」の応援を計画しています。

昨年から丹波在住で20数年の友人と新たな地域おこし「丹波発ニューツーリズム実行委員会」を立ち上げました。11月に全国でツーリズムによる地域活性化を進めている自治体や地域団体（滋賀県からは野洲市、長浜市からM・O・H通信の辻村編集長に参加いただいた）が一堂に会して情報交換、人との交流を図ることを目的に「丹波市ニューツーリズム交流大会」を開催しました。今年は10月5日に開催予定。これを契機に、

ニューツーリズムを住民主体で推進し、都市との共生、対流、協働を目指した活力ある地域づくりを進めていきます。

成長から成熟へ

—希望ある未来へむけて

少子高齢化や人口減少社会にあつて、バイオリージョン（生命系の地域循環システム）による地域の多様性の確保と、師在自然の社会デザインが、すぐれた豊かな地域づくりといえます。

おりしも、自然暦〃二十四節気、七十二候〃が静かなブームになっています。南北に長い日本列島は多様で豊かな気候風土を持つていることの意味を、あらためて足元を見つめる機運が起こっています。もう一度私たちの暮らし、自然、風土―そこから生まれた先人の知恵を問い直す動きです。

エシカルな作法は宮沢賢治の『注文の多い料理店』の冒頭に書かれています。「わたしたちは、氷砂糖をほしくらいもたないでも、きれいにすぎとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光を



のむことができます。また、わたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石入りのきものにかわっているのをたびたび見ました。わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。」

以前、本誌2008年3月号で掲載された拙文の中で、私は「いずれ『環境文化』と言わなくても、ごく普通の生活文化ですむ時代が来る」と述べました。環境は誰もが身に着けた所作で、成長から成熟の時代を迎えたこの国は、量的拡大から質的成熟の社会づくりを目指します。私たちの生活は、美しいエシカル「センス」と「スタイル」を標榜していくことが幸福な希望ある未来

あだーじよからのお知らせ

昨年から朝日新聞社系列のフリーペーパー「朝日ファミリー」を発刊している、アサヒ・ファミリー・ニュース社さんとのコラボでソーシャル事業「エシカルスタイル」(エシカルカレッジ＝講座やツurisズム、交流イベント等)を新しくはじめています。

皆様にはぜひ「エシカル」という理念と一緒につむいでもらえるお仲間になっていただきたく、また、今後の事業展開において、何かしらの形でご尽力を賜りたく思います。

キックオフとなる催事として、昨年10月に「エシカルセミナー」を開催し、11月から「エシカルカレッジ」を開講しています。

※詳細は、下記のエシカルスタイルWEBサイトをご覧くださいませ



につながっていくことだと確信しています。それはなによりも子どもたちが希望に、未来に目を輝かせている社会です。

而今

岡靖敏

●おか やすとし 1945年岡山県生まれ。地球環境に健全な文明・文化の創造をめざして、社会運動と政策提言のできるグローバル環境文化研究所を設立。2007年一般社団法人あだーじよを創設、代表理事に。都市と農山村の交流、過疎化、森林問題から始まり地球サミットに参加するなど地球環境問題に取り組み、地域づくりに関わる。市民参加・生態学的視点でのまちづくり、地域環境計画、環境教育が専門。企画からエコイベントまで数多くプロデュース。ピオトープを取入れた農業用水路の整備「水と緑のプログラム」で建設省(当時)の、手づくり郷土賞を受賞。共著に「地球環境のために」(ちくま文庫)など。

●あだーじよ

大阪市中央区平野町3-1-7

セントラルビル4F

TEL: 09-6622-0201

http://www4.ocn.ne.jp/~ada-gio/

●エシカルスタイルWEBサイト
http://www.ethical-style.jp/



スーパーの前で資源物回収活動

⑩ 寄稿くしあわせ「夢を語ろう」

変化の時代

藤田 アニコー

循環型社会創造研究所 えこら 代表

滋賀グリーン購入ネットワークで出会った、ハンガリーの女性。いつもニコニコ楽しそうで、日本大好きオーラが感じられる。ハンガリーの空気感をご紹介します。



国際交流



●●●●
**よく似た名前だ
循環型社会創造研究所**
●●●●

皆さんは今どんな時代だと思えますか？ 経済危機・異常気象・少子高齢化… どれもにしても、変化の時代だと感じていますか？ 私は変化を感じて、動きだしました…

循環型社会創造研究所へこちらは、名前の通り、循環型社会の実現を目指しています。「エコ」や「グリーン」の言葉をこの想いを短く、分かりやすくしたもので、実はハンガリー語が混ざっています。ハンガリー語で「környezet」は「環境」という意味で、「környezet」は「丸・循環」という意味です。

今の時代はやはり持続可能にならないと、この地球に人類や生物が生き延びていけなくなる時が来るのではないかと思っています。

ですから、ライフスタイルの変更が必要。その変更は、選択すれば、楽しくできるはず。

そういったことを考へながら、「エコ」で様々な楽しいイベントを計画し、エコ

なライフスタイルを提案しています。仲間と一緒に「エコ」を立ち上げたのは2010年7月。それまでの道はどのような道だったのでしょうか？

●●●
大好きな国、日本
●●●

ハンガリー生まれの私は2004年に始めて来日しました。今年でちょうど10年目になりますね… 当時、エコのことや環境保全のことを全く考えず、大好きな日本でたづぷり楽しんでいました。

もちろん、ハンガリーの家では父の厳しい育て方によって、節電や節水などに取り組んでいましたし、大学で環境問題を勉強しましたが、私の微力では何もできない、しても意味がない…、何をしたらいいかわからないままでした。

まさか、私の大好きな国、日本で環境保全活動をやるって夢にも思わなかったです。夢といえば、日本に行くことが夢でした。

13才の時から空手を学び、武士道や日本文化にあこがれていました。いつか必ず日本に行くこと決心し、24才の時にその夢が叶いました。日本に来て、長く

ると、様々なことが分かり、私の大好きな日本文化が弱くなっていることやお金を中心にした強い消費社会になっていることに心を痛めました。自然と調和している日本、武士道精神、助け合いの社会など、誇りに思える文化の代わりに大量消費、大量廃棄、環境破壊、表面的な生活、原発問題、心が離れてしまっている人々。もちろん、世界でどこでもある問題ですが、日本の素晴らしい文化を知った上でこの変化に気付いたので、余計に残念な気持ちになりました。

●●●
自分が変われば社会も
●●●

その時にNPO「地球村」と出会い、環境問題は自ら解決しないと何も変わらないと気付かされました。環境問題はグローバルな問題に見えますが、実はローカルから、さらに一人一人から始まっています。自分が変わったら、まわりも変わり、まわりが変わったら、社会もどんどん変わっていくのではないかと思いました。

ですから、「エコ」の活動に簡単に、身近なもので協力してもらえぬように考えました。その一つの活動は資源ごみ





1

- ① ネイチャーゲーム
- ② キャンドル作り
- ③ 資源ごみ回収活動の始まり
- ④ クリスマスリース作り
- ⑤ エコなお菓子作り



3



2



5



4

を集めて、びわ湖の環境保全に寄付することです。資源ごみは協力いただいているリサイクル会社でリサイクルされ、びわ湖のために使われています。そうすることにより、資源ごみを提供してくださった方々の価値観が変わり、資源ごみはゴミではなく、びわ湖を守る活動にかざれている大事な資源だと意識できるのではないかと思います。

●●● 楽コフ「RINKU」 ●●●

そして、活動が楽しくないと続かないですね。「えくら」のイベントでは、楽しくエコなライフスタイルを体験できることに心掛けています。

そして、とても大事なことは「そうぞう」です。Innovation & Creativity。ワークショップの際、エコなアイデアにより自分の最高を想像し、実現する。そのことが社会に結び付くと、持続可能な社会に近づけることができるのではないかと感じています。

日本は素晴らしい文化だけではなく、素晴らしい技術を持っています。その二つを組み合わせたら、エコの時代の世界トップ

フになれると信じています。

しかし、それには意識が大事です。そして、子どもたちだけではなく、親の方々の変化も大切です。そのために、えくらのイベントに親子で参加できるようにしています。家族での想い出作りはライフスタイルの変化につながることを望んでいます。

●●● インターナショナル&エコ ●●●

また、外国人として楽しく交流し、異文化を経験するイベントにもよく参加させていただいています。そして、「インターナショナル&エコ」という独特な組み合わせでイベントを開き、環境問題は広くて、グローバルかもしれないが、身近に感じて、できることを考えるきっかけを作っています。

●●● つながり・成長・家 ●●●

今、私の夢の一つは、こんな活動を通じて皆さんとつながり、地域でコミュニティを作って、ともに成長することです。また、環境に配慮した家に住みたいなど考えています！

様々な団体と連携し、活動を広げて

いきますので、どこかで皆さんとお会いできることを楽しみにしています。



故 マイケル・ジャクソンの言葉より

●ふじたあにこー
1980年ハンガリー生まれ。ハンガリーで空手をやってきたきっかけで日本が大好きになる。2004年に来日し、2004年に来日し、大阪大学経済学研究科などに留学する。卒業後、2009年に滋賀県の近畿環境保全株式会社就職。環境問題に携わっていき、2010年に仲間と共に「循環型社会創造研究所えくら」を立ち上げ、リサイクルとリユースを推進しながらびわ湖の環境保全やエコなライフスタイルを呼びかけている。滋賀県地球温暖化防止活動推進員、草津市国際交流協会 国際理解部会長、環境省「環境教育等促進法」地域アドバイザー委員。公益社団法人日本青年会議所近畿地区協議会 第一回近畿地区人間力大賞 奨励賞受賞

●循環型社会創造研究所えくら
滋賀県栗東市中沢2-1-2-20
TEL:08-0-38664-25991
http://ekora.jp



読者の皆様へ
これまでを振り返り、
未来へ向けて――



草野 勉

新江州株式会社
代表取締役社長

読者の皆様へのメッセージインタビューのはずが、
いつの間にか三者対談に…。



草野 『M・O・H通信』がおかげさまで10周年を迎えました。読者の皆様はじめ、執筆者の先生方には多くのご支援を賜り、大変感謝しております。

ところで、辻村君は入社して20年余りになるけれど、『M・O・H通信』はどうやってできたか覚えてる？

辻村 もちろんです！ 私が森会長の秘書になり、森会長からお聞きする環境に対する思いを、なんとか形にして皆さんに発信したいと思ったのがきっかけです。

草野 初めは社内でも「見えないCSR」と言われ、『M・O・H通信』が理解されない時期もあった。でも「会長の思いが冊子を通して伝わることは凄い会社だな」と外から評価を受け、また毎号楽しみに待ってくださる読者がいる。当社のセールの強い味方になるし、会社の品質を保証する材料になっている。

辻村 嬉しいです。私は入社して初めの10年、草野社長に鍛えていただきました。当時はデザイン部隊と一緒に営業に回ったり、『湖北学卒採用戦略委員会』で学生就職支援の冊子を作ったり、セミナーを開催したりしていました。当社の経営方針『人を大切に』の草作成で口述筆記をさせて頂くなど、今思えばとても貴重な学びの場でした。

草野 そこでの経験が、今の辻村君には大きな基礎になったのでは？ 『M・O・H通信』で過ごした10年は、森会長との二人三脚でありながら、会社からは孤立

する部分もあったかもしれない。相談できる仲間がいなかったり、辛抱や苦労もあったかもしれないが、継続は力なり。見てくれている人には伝わっている。しかし、一人で編集を担うことで辻村君の色を出しすぎてもダメな時もあった、現在は上岡君も一緒に…。

上岡 私は大学の講義で森会長と辻村編集長の話聞いて、企業がここまで地域密着のCSR活動を行っていることに驚きました。大学で環境政策を学んでいたこともあり、私も『M・O・H通信』の仲間に入りたい！と思いました。

辻村 今後、若い人たちの力に期待しています。

草野 今日まで続けられたことは、読んでくださる読者の皆様、支えてくださる執筆者の先生方、編集に協力して頂くライターやカメラマンのおかげです。また森会長の思想を軸に発信する『M・O・H通信』は、当社のCSRでありながら、アンテナショップを担うPR部門でもある。『M・O・H通信』を通して新江州のことも知ってもらいたいと思います。

皆様、これからも『M・O・H通信』をよろしくお願
いします。

人を大切に。

草野 上岡



スタッフ
座談会

もうちゃん 好きだなあ

M・O・H通信第1号が発行されたのは2003年3月でした。
おかげさまで、今年で10年目を迎えます。

そこで今回は、M・O・H通信を製作しているライター、カメラマン、デザイナー、そして編集長による座談会を行いました。
お手持ちのバックナンバーを横に置いてお読みください。



0号「創刊準備号」もうの会をつくろう!と意気込んで

編集長 2003年頃、私は新江州に入社して12年目、営業を担当していました。営業マンで楽しかったのですが、森会長に秘書が必要となり、私が就きました。会長の側で循環話をよくお聴きしました。会長から聞いた話をみなさんにもお伝えしたいと思ったのが一つのきっかけです。会長がおられたからM・O・H通信が生まれました。

たまたま写真家と社内には優秀なデザイナーがおられた。それで、何か作りたいという話になりました。

冊子のコンセプトは会長の口癖「もつたいない、おかげさま、ほごほごに」で、タイトルは「M・O・H通信」としました。それからデザイナーさんに電話して、「ロゴを作って」とお願いしました。

デザイナー 「牛のイラスト描いて。何でもいから」と言われたんです。それがまさか十年も使われることになるとは。もう少しかわいく描いておけばよかった(笑)。

👤 **執筆者懇談会**
なくてはならない

かった(笑)。

編集長 初めは、「M・O・H」では読めないと言われましたが、いつか分かっていただけたらと思い、決定しました。

執筆者の方々が毎号集い編集方針を確認して下さいます。執筆者懇談会と呼んでいます。内容がとても濃くて勉強になります。

M・O・H通信の体裁

編集長 創刊準備号はA4・4ページです。当初は2ヶ月に1回のペースで発行し、最高18ページありました。

A4サイズでは靴に入らなかつたので、靴の中に入るサイズにしようと、12号(2006年・春)からA5サイズ・平綴じにしました。13号(2006年・夏、3周年特別記念号)で増ページにし、背表紙を作ったのですがタイトルを入れ忘れしました。14号(2006年・秋)で背表紙にタイトルが入りました。ここから季刊になりました。

2ヶ月に1回というスパンは、会長が参加される講演などで情報をためてフレッシュな情報を入れるのにはちょ



16号「九州」悩みながら飛んだ



13号「2030年」未来の社会像を追及した



12号。ハンドブック判になった絶版です

うどよかつたのです。

季刊になった現在では、そのフレッシュさをどう保とうかと悩んでいます。

創刊当時の内容

編集長 創刊当時から社内情報は載せず、循環型社会の話や今関信子さんのご家族の話や、森会長の若い頃の丁稚話などを掲載していました。

文章は井上昌幸さん、末永國紀さんに書いて頂き、佐々木洋一さんにイラストを、しみずやすおさんにマンガを描いて頂きました。今、誌面を見ると流れがゆつたりしています。当時の誌面は、時代の先取りなどと考えていなくて、そのとき興味のある「この話いいな」ということを載せていました。

何かを作り出すには時間が一番必要です。今は内容がとても深いです。毎回力んでしまっています。

どこから内容が変わっていたか?

ライター 12号(2006年・春)はまだ少しのんびりですが現在の感じに近く

なっていますね。

編集長 「世の中の役に立つものを作らなくては」と意気込みました。

ライター 15号（2007年・冬）は今のテキストに近いですね。

編集長 3周年記念・13号（2006年・夏）、マータイさんが登場する号で変わりました。マータイさん効果で「もったいない」が世界共通語になり、「もったいない」が、みなさんから注目されるようになった。また、滋賀県との協働として取り組みだしたのもこの号からです。
ライター この号から条例の話などが掲載されて、今より堅い感じ。

人とのつながり

カメラマン 当初はネタもそれほどなかったから、いろいろな人と出会っていくうちに、次の人を紹介してもらっていました。

14号（2006年・秋）の「ゴジカラ村」吉田一平さんは、愛知県長久手市の市長さんになり、今はバリバリ市を動かしておられます。そういう人に早い時期に会っています。いつも誰かが次の

人を紹介してくれます。

編集長 私は2007年滋賀県立大学で1年間、大学院生と社会人が一緒に学ばず授業を受講して、近江環人の称号をもらいました。この時、「M・O・H通信」を中心にした地域活性化」をテーマにしました。滋賀県立大学との関係ができたことで人脈も深まってきました。

会長の主要テーマが環境だったので、私は、環境の中にある自分らしいテーマとして食に注目し「地産地消」「食べる」を取り上げました。

そして、2010年から地域の食材を紹介する「よばれやんせ湖北」を年に1度のペースで開催するようになりました。第一回目は、何をしたらいいかわからなかったですが、北井香さんに助けられました。

デザイナー それをカタチにしているのは。その行動力はすごいです。

編集長 この後、環人ネット、なでこ滋賀ネット、語り部マイスターと続きます。誌面の動きがヒトとモノとコトの動きになっているのがうれしいです。

きっかけは、2010年にもったいな

い学会の石井吉徳理事長（東京大学名誉教授）に勧められて参加した日立環境財団環境賞の審査で、M・O・H通信の活動を発表したことです。

「本を作るだけではイノベーションになっていないからだめ」と言われ、悔しくて始めたのが「よばれやんせ湖北」です。

表紙

デザイナー 18号（2007年・冬）九州特集号から表紙が全面写真になりました。

編集長 当時、M・O・H通信はこれでもいいのかと悩んでいました。

それまでは、表紙の半分を写真にして表紙から、M・O・H通信のテーマをお知らせしようとしています。九州特集で、航空写真がきれいだったので全面写真にしようとスタイルを変えました。
カメラマン 写真はストックから提供することが多いです。

表紙にぴったりと思い知人のイラスレーター・ダニーさんをお願いしました。30号（2011年・冬）雪山の表紙は、卯年なので兎を入れたのですが…。

真っ白なので同化して分かりにくくなりました。

この方は今ではひっぱりだごです。

デザイナー 表紙を作るのは毎回とても楽しい作業です。カメラマンさんは季節に即した写真を送ってくれます。色は、毎号でテーマカラーを決めています。

編集長 22号(2008年・冬)は牛年でした。我が家の近くに住む高校生に「牛描いて」と頼みました。「おばちゃん、どんな牛描くの?」と聞くので「力強い」と心えて出来上がったが表紙のイラストです。あと、41号の椿も近所の高校の先生にお願いしました。

自由な空気

ライター 私は、最初、仕事の振り方がざっくりしているのに驚きました。編集長に文字数を確認したら、「分かるん」と言われた時は不安でした。

取材するゲストは熱い人ばかりで、どの方もしゃべりだすと止まらない。でも原稿にはならない話が面白かったりして、人生経験が深まりました。

カメラマン 21号(2008年・秋)では沖縄特集を組みました。沖縄には、新江州の取引先があり、その人が呼んでくれたのです。

編集長 会社で、隣の席の千葉さん(故人)が「沖縄におもしろいおばちゃんがある」と言った一言で企画しました。

おもしろいおばちゃんとは、和宇慶ミツ子さんです。彼女が座談会に出席する女性を集めてくれました。沖縄を牽引する女性の集まりでした。

そんな風に自由にさせてもらえる会社に感謝しています。

デザインについて

編集長 デザイナーさんとは入社以来二十数年の付き合いです。当時から無理難題ぶっかけていたよね。

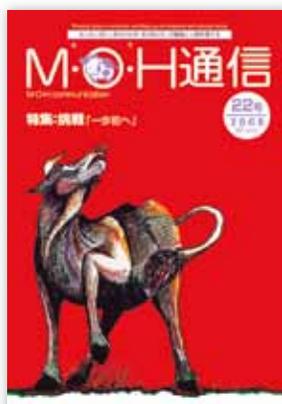
デザイナー その時から、アバウトな仕事をいただいております(泣)。
編集長 「会社案内作るねん。鉄工所やねん。一緒に来て」とかね(笑)。



21号「沖縄」女性が元気でした。沖縄の伝統と気質を感じられた



30号「絆」卯年なのでうさぎのセーターを着ました



22号「挑戦」丑年に喜んだ

毎回作ってくださるモノがいいから、次の発注がありました。

その後、私は会長秘書に入り、デザイナーさんは独立されました。

M・O・H通信で私が取り上げるネタは、面白そう、これはいけるといふ説明のできない感覚です。それを皆さんが形にしてくれている。

デザイナー 決め込まないで「こんな感じで」と出してくれるから料理のしがいがあります。

一冊の本を作るのに筋を通すためにテーマを読み取りデザインに起こす作業をしています。ページが足りるか気になりますが、考える部分が多いのは楽しい。

若い人が育つ

編集長 M・O・H通信の楽しいところは、Uさんを始め若い人が育っているところです。20代から50代の方が制作に関わり、世代を超えてM・O・H通信の構成について自由に話をしています。

20代の一（進行管理）さんの中で一番印象的なM・O・H通信は？

進行管理

同期のKさんが表紙を担当されたのはうれしかったです。

編集長はフットワークが軽いところがすごいなと思います。「いいやん、やる」というところがイイですよ。

編集長 イラストは描きたいという人に描いてもらっています。

写真やイラストが増えました

編集長 読者の方から内容が難しいという声や、子ども読めるようにしてほしいとの声も聞きます。

進行管理 写真やイラストも多くなり、以前よりは読みやすくなりました。

デザイナー 印刷カラーが2色4色混合のときは、写真に頼れないということがありました。28号（2010年・夏）からフルカラーになり写真が増え、レイアウトの自由度も増えました。

編集長 印刷コストがあまり変わらないうという印刷業界の事情に助けられました。写真が増えたのはインターネットのデータ送信サービスが発達しメールで送れる画像の容量が大きくなったこと

とでしょうか。質の高い写真を提供して下さり、ありがとうございます。

大企業の会長さんや社長さんも取材しています

編集長 取材に関しては、お願いする方や企業さんも喜んで協力してくださいます。これは会長の人徳と当社の66年のバックボーンのおかげです。どこに伺っても丁寧に迎えてくださいます。営業の人たちが一生懸命営業に行っておられるから、みなさんちゃんと話を聞いてくださる。

印象に残っている企画

編集長 亡くなった方がおられますね。板倉安正さん、日高敏隆さん、上田健吉さん、中井二三雄さん。中井先生のエッセイ良かったよね。

デザイナー ほっとするコーナーでしたね。

編集長 企業さんに人気があったのは、末永先生の近江商人の連載です。今関先生、内藤先生との特集作りも大切なものでした。



39号「魅力発信」活動しよう！と行動を起こす



29号「礎」偶然のワンショット



37号「未来創成」表紙は若手の作品。男の子？女の子？

懐かしいのは壇上さんです。写
真はいいけど文章が高尚でした。
カメラマン 琵琶湖の四季を撮影
していると感動的なシーンに出会
います。印象に残っているのは、
29号（2010年・秋）の魚群の写
真です。琵琶湖岸に鮎が集まって
いるところに偶然通りかかり撮影
しました。この時期に水辺に寄っ
てきてそれから川を遡上し産卵す
るそうです。

編集長 私は、誌面でもよばれや
んせ湖北が実現したのがうれしかっ
た。地産地消を生産者と消費者の
交流で応援したい、と思っていま
す。琵琶湖に育まれた地元のおい
しい食材とお料理を掲載しました。

まとめ

編集長 アバウトな編集長と、きつ
ちり書いてくれるライターさんと、
ドンピシャな写真を出してくれる
カメラマンをまとめているのはデ
ザイナーさんです。我々をうまく
転がすコツはありますか？

デザイナー 隙間を作っておくことで
しょうか。「こうでないといけない」と
なると、どうしようもなくなります。

編集長 フィーリングが合っていますね。

デザイナー 編集長もこだわりがない
ですよ。

編集長 あまりない（笑）。

デザイナー 変なこだわりがないから、
「伝わるのなら別のやり方でもいいやん」と
言いつ柔軟な対応をしていただけ。

編集長 ライターさんはどうですか？

ライター 対談の人の熱いエネルギー
を浴びて、いつも頭が煮えて原稿が長
くなってしまっ。長すぎる原稿でデザイ
ナーさんを困らせて申し訳ないです。

編集長 カメラマンさんは？

カメラマン 特になし。言われるまま
に（笑）。

新人 M・O・H通信ってこんな風に出
来てきたんですね〜！ これからも皆
さんと良いものを作っていきたいと思
います。



山暮しく子育て日記

2010年生まれの次男
シンクロー。

かなりやんちゃで
手強いわがまま3歳児

それもそのはず。
木地山区で幼頃は
シンクローひとりだけ。

みんなにかわいがられてる。

シンクローおはよう
さんぽか?
ウーン!



ゆきかきするー!

雪の日はもちろん

さんぽ

雨でも

さんぽ

晴れても

じっとしていないので

おもちゃのくるま





近所のおじいさん、
おばあさんを訪ねては

ジュース
ちやうだい

あは

ほれおかしやろ

これではいかん
地域の方とのふれあも
大切だけど

どうせたい
同世代のお友達とも
遊ばせないよ...




おもちゃ横取り。

お友達にはいじめてきた...

あ

ふんっ

おもちや横取り。

こかつかつか

朽木保育園内の
子育て支援センターへ。




つめた〜い
視線...

やっぴんかっの
勝ち〜!

たががな
大概泣かせる

やめて!
とらんといて!!




作: 松本 洋





9歳年上の兄と6歳年上の姉の行動をよく見て真似をするからか、次男のシンクローは、かなりワイルドです。男の子はよく動く、と承知していましたが…。買い物中でも外食中でも目を離すとどこかへ行っちゃうし、お兄ちゃん、お姉ちゃんと同じく自分がもできる、と思っているのか、ヒヤツとする行動もしょっちゅう。知り合いみんなに「この子の動きは激しい」と言われます。そんなシンクローも4月から保育園児に。友達とうまく遊べるかな、という不安もあります。朽木保育園の

の先生は園児をよく見てくれるので、お任せしちゃえ！と思っています。園児の数も少ないので、全ての先生が全ての子を覚えてるし、親の顔まで知ってくださっています。トラブルがあつても何とかなるかな。このM・O・H通信が発行されるころには、保育園生活はどうなっているかな？

ところで、朽木だけでなく高島市内の保育園は待機児童ゼロ。保育料も国の基準より安く、また未就園児の一時保育もあるので、山村でも子育ての環境ばっちりです！

●本名加藤みゆき。人口17人の集落に住み3人の子育てに奮闘中。将来、家族で海外へ旅行するのが夢。



三島池の春便り

三山 元暎



さし絵:中川 善雄

アマナ

ハコベ

オオイヌノフグリ

二十四節気では、三月六日から春分の日の前日までが啓蛰。地中の虫も「春がきた」と感じる季節である。

春のいのちが漲りはじめた家の庭隅に、一人静がわずかに芽をもたげている。わが家のまわりではボケやウメ、ツバキが咲いている。あぜ道では、白っぽい光を浴びて瑠璃色の花をつけたオオイヌノフグリが咲いているのを見つけた。小さな星のような白い花をつけたハコベも咲いている。

家のそばの三島池を歩いていたら、パン屑を投げ与える親

子づれめがけて、オナガガモやヒドリガモが我先にと近づいてきた。人が近づくと岸から離れてしまいうマガモとは対照的だ。池の鴨たちは北帰行に備えてか、しきりに羽ばたいている。長距離飛行のウォーミングアップなのだろうか。

戻つきし鴨に水面のへこみやけり 宮坂静生
やはらかきはこべと水と鴨 帰る 羽公

池畔のシダレヤナギも萌黄色の新芽を吹き始めている。

ほつかりと黄ばみ出でたり 柳の芽 暎台

お池隣の「女溜」の土手の日だまりには、白いアマナの花がひっそりと咲きはじめた。やがてあたり一面は、残雪の伊吹山をバックに、この可愛く、すがすがしい鐘形の花

が、今を盛りと咲き誇ることをだろう。

春がまちがいなく、こちらへと近づいている。

三山 元暎

●みやま もとあき 1940年滋賀県坂田郡山東町(現・米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺前任職。

悠々自適 中川 善雄

●なかがわ よしお 1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

最近入手した、気になる本・CD・DVD
をご紹介します。

BOOKS

昭和の犬



- 著者／姫野力オルコ
- 発行／幻冬舎
- 価格／1600円＋税
- 内容／第150回直木賞受賞作。著者は滋賀県甲賀市生まれ。昭和から平成、約45年をかけて、いろいろな犬とのエピソードとともにひとりの女性がかんだある幸福のかたちを綴っている。

トリガール



- 著者／中村航
- 発行／角川マガジンス
- 価格／1400円＋税
- 内容／きつと世界で一番わたしは飛びたいと願っている。琵琶湖で開催される鳥人間コンテストに夢をかける、空飛ぶ青春部活小説。

TURNS Vol.07



- 著者／第2プロGRESS
- 発行／9800円
- 内容／全国各地の魅力あふれるローカルライフを紹介する。M・O・Hギャラリーにも掲載した、お米の和ろうそくの大興や野田版画工房が登場する。

希望／日本から世界を変えよう



- 著者／大西つねき
- 発行／日本一丸
- 価格／1800円＋税
- 内容／金融、財政、国債の根本的な仕組みを解き明かし、円高、デフレ、政府の財政赤字、土地問題を一気に解決する方法を示した希望の書。

みくな びわ湖から Vol.120



- 発行／長浜みくな協会
- 価格／4800円
- 内容／長浜の地域を紹介する同誌。「ごきげん湖国生活」のコーナーで新江州女性営業マン、山川博子（働きマン）が紹介された。

近江巡礼 祈りの至宝展



- 編集 発行／滋賀県立琵琶湖文化館、毎日新聞社
- 内容／滋賀県立琵琶湖文化館の収蔵品を紹介する。滋賀の仏教美術、神道美術などの魅力ある「神と仏の美」を感じることができる。

観光ガイドブック いちばん体験南あわじ



- 発行／南あわじ市産業振興部商工観光課
- 内容／南あわじ市の『ほんまもん体験』を紹介する観光ガイドブック。同市が誇る自然や歴史、食材、温泉、体験施設などをたっぷり掲載している。

小舟木エコ村ウォーク (Vol.22)

建物の気密性を高めることが省エネのヒケツ



近江八幡エコハウス



NPOアスクネイチャー日本の山口琴子氏の説明

滋賀県近江八幡市にある小舟木エコ村は“持続可能な社会”づくりを目指してつくられたエコ村である。1月25日、環人ネットの研修として私たちはこの小舟木エコ村を訪れた。

小舟木エコ村では、家庭菜園や生ごみの堆肥化、農産物直売所にて周辺農家や住民が作った農産物を取り扱うことで、地域の畑と食卓をつなぎ、有機物の循環を図っている。また、滋賀県産の木の率先した使用や雨水タンクの設置等、可能な限り機械に頼らない住人にも地球にもやさしい生活をする工夫をしている。またなにも工夫がされており、屋根や外壁の色、庭、駐車場への配慮をすることで、まち全体で統一感のある風景づくりがなされている。

||||| 仕切りを低く

実際にまちに出て歩いてみると家と家の間の柵をあえて設けず、子ども達が自由に行き来し遊んでいるところを見る事ができた。また柵はあるけれども、できるだけ調和がとれるように材質や高さを考

慮して設置しているところも見つけることができた。玄関先や公園では、寒空の下でも元気に遊ぶ子どもたちにくさん会うことができ、人と人とのつながりを感じることができた。

||||| 窓は二重に

今回特別に、小舟木エコ村の事業を担う「NPOエコ村ネットワーク」副理事であり、エコ村の住人でもある飯田航氏のお家にお邪魔することができた。スイスから取り寄せた窓ガラスや防熱効果の高い外壁などを取り入れることで、少ないエネルギーで快適な暮らしを実現していた。

||||| 住民の理解と協力

地球温暖化や人と人とのつながりの希薄化が社会問題とされている現代において、小舟木エコ村は快適かつ持続可能な暮らし方の実現に取り組んでいる。この取り組みに住民同士の理解・協力がとても大きく貢献していることを感じることができた。

人賤の森
環人ネット





～食hana 咲かそう!～

食について話す交流会 ③

in セトレ マリーナびわ湖

冬の日美味しいスペシャル

近畿農政局 女性経営者発展支援事業により実施



満員御礼。セトレマリーナびわ湖にて



古代米と滋賀の在来大豆みずぐりをつかった季節野菜のサラダ



マルシェ大好評



フレッシュハーブティーのお手前(岩田さん)

- 10時30分 開会
- 10時40分 コンセプト紹介 「琵琶湖をめぐる物語」と共に育つホテルを目指して (セトレマリーナびわ湖 企画ディレクター 菊池玲奈)
- 12時00分 「なでしこ特別ランチコース」 披露&意見交換 (於 バンケットホール)
- 14時30分 閉会

見目麗しいお料理と、にぎやかなマルシェ。2月15日(土)に開催された、食hana交流会「このひと」のレポート。

このイベントは、農に関わる女性を中心とした異業種ネットワーク「なでしこファーマーズ」が、守山市の琵琶湖大橋たもとに誕生したホテル「セトレマリーナびわ湖」との共催で開催。滋賀県屈指の農の担い手が作るこだわりの産品が、シエフ吉村透さんの技と感性に出会い、生産者自身もオドロキを感じるお料理に生まれ変わりました。

ランチの前には、滋賀産の木材や建築技法を取り入れて作られたホテルを見学、地場産品の活かし方を学びました。

食材・文化、多くの資源を持つ滋賀の良さが、切り口を変えることでさらに魅力的になる。食や実物のホテルを通して、参加者一同が実感。感性に磨きをかけました。



美の滋賀語り部マイ★スターになろう!

『美の滋賀語り部マイスター』養成講座

2013年度滋賀県「美の滋賀」地域づくりモデル事業採択事業

暮らしや文化、歴史が育んできた「滋賀の美しさ」には、何気ないけれど深い魅力があります。そんな美しさをもう一度踏み込んで感じ、滋賀県各地を訪れる人へ伝える力を育みましょう!



3回以上参加すると
マイスターの称号がもらえる

〈第3回〉
「各地に光る、街並みの美を知ろう!」

- ◆日時/2014年1月12日(日)
- ◆場所/近江八幡市
- ◆講師/濱崎一志氏(滋賀県立大学 教授)



〈第3回〉 ① 八幡山を望む ② 旧近江八幡郵便局。ヴォーリズ氏の設計 ③ 見越しの松がある谷田邸 ④ おやしきは不思議がいっぱい ⑤ 濱崎先生の信頼はあつ!

豊臣秀次が八幡山に城を築いたことで商工業が発展した近江八幡。近江八幡の町屋の建築に視点を当てて話を聞いた。当時禁止されていた三階蔵、富の証とされた松の木、広い間口。参加者からは「濱崎先生という語り部がいることで何倍も楽しめた。自分も語り部になりたい」との感想も聞かれた。



小幡町資料館見学後の説明

〈第4回〉

「時が紡ぐ、文化の美を知ろう!」

- ◆日時/2014年2月9日(日)
- ◆場所/高島市マキノ町海津 中小路集会所
- ◆講師/大沼芳幸氏(安土城考古博物館 副館長)



1



4



3



2

〈第4回〉 ① この日は対岸が見渡せた。すばらしい。ハシイタを見学 ② お寺の山門が立派 ③ 今は、お酒がおいしく仕込まれています ④ 営々と築かれた防波石垣の石積み、ズシを通る



おつかれさまでした。海津中小路集会所 和心(なごみ)にて



魚治さんのフナずし茶漬け

重要文化的景観に選
定された「高島市海津・
西浜・知内の水辺景観」
を題材に、水辺景観の
魅力を読み解き、景観
保全の取り組みを学ん
だ。全4回の講座がこれ
で終了し、8人のマイ★
スターが誕生した。



講演日記

執筆者懇談会 34

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。2013年12月～2014年2月の講演をダイジェスト版でお知らせします。



●日時：12月26日
●主催：弊誌

●会場：旧大津公会堂
大津グリル

●参加：14人

●内容：43号『しあわせ「夢を語る」』の取材進捗状況の報告を行った。3月の「M・O・H Cafe」に向けて、執筆者懇談会も主催となって会を盛り上げようと一致団結！

株式会社山田製作所 会社見学会

●日時：1月17日

●演題：「徹底した3Sの考え方」

●講師：山田茂（山田製作所代表取締役社長）

●会場：山田製作所

●対象：株式会社シガウッド、新九州株式会社

●参加：約50人

●内容：3Sとは整理・整頓・清掃のこと。3Sは「守る」事を決めて

決めた事を守る」という企業文化をもたらす。編集長辻村もM・O・H通信を紹介した。

高島コレカラ講座04 コミュニティ・アーキ テクトの挑戦

●日時：1月31日

●主催：高島コレカラ講座事務局

●演題：「ひまからでたまこと」

●講師：辻村琴美

●会場：風結い

●対象：一般

●参加：6人

●内容：さまざまなるとの交流の中で行う地域づくりの在り方を参加者と語った。

M・O・H通信執筆者 懇談会

●南あわじ市視察

●日時：2月2日

●会場：島の学校文化



祭、古備国際大学 他

●参加：11人

●内容：執筆者懇談会初の遠征。NPO法人SODAのまちづくり活動を学んだ。

環境、まちづくり関連 先進事例御視察

●日時：2月12日

●テーマ：「新九州のCSRについて」

●会場：新九州株式会社

●対象：内閣府経済社会総合研究所、滋賀大学
●参加：11人
●内容：内閣府と滋賀大学による共同研究で当社を視察された。CSRについての考え方や循環型社会システム研究所の取り組み内容について話し、組織体制等に関する質疑を受けた。



受賞
しました

「文化で滋賀を元気に!賞」 「ヒトヤコトをつなぐ文化賞」受賞!!

文化・経済フォーラム滋賀が主催する「文化で滋賀を元気に!賞」の「ヒトヤコトをつなぐ文化賞」を受賞しました。

この賞は、文化で滋賀を明るく元気にし、活力あふれる地域社会の実現に特徴ある貢献を行っている団体または個人を表彰するものです。

M・O・H通信の発行、講演会、シンポジウムの開催など、滋賀の文化を伝え、人を育て、地域の再発見に貢献していることが評価されました。ありがとうございます。



表彰式の様子

掲載
されました

女性の活躍応援情報誌 『CARAT滋賀2014』に 新江州掲載!



滋賀県内の企業や団体に活躍する女性を紹介した冊子『CARAT滋賀2014』が県より発行され、当社が掲載されました。女性の活躍に対するトップの想いや女性力活性化委員会の取り組みを紹介されています。6500部発行され、県内の各種団体を通じて無料配布されます。

命名
されました

2014年春、 滋賀県は しゅららぼん県 になる!!

「偉大なる、しゅららぼん」
3月8日ロードショー

まきめ

万城目学氏の小説を映画化した「偉大なる、しゅららぼん」の公開を記念し、物語の舞台であり撮影地にもなった滋賀県が、しゅららぼん県に命名された。



高木さん家の健康エコ生活

©サトウチユウコ



感謝の言葉

辻村編集長

皆様のおかげで、10年が経過しました。桃栗三年柿八年十年ひと昔といいますが、よくぞ、続けてくださったと感慨無量です。発信+ヒト+コト+モノ=M・O・Hになればいいなと願い、『よばれやんせ』、『なでしこファーマーズ』、『選人ネット』を生んでいただいた関係者の皆様のご尽力に感謝します。何よりも、支えてくださる読者の皆様。「応援してるよう!」といつもメッセージをいただけて力になっています。取材に応じてくださる皆様、執筆者懇談会の皆様、無理難題を吹っかけて困らせているスタッフの皆様、新江州グループの社員の皆様、関わる全ての皆様ありがとうございます。森建司代表の願いは、「しあわせな暮らしへの革命」です。これからの10年に向けて、若手と一緒に取り組みたいと思います。今後とも弊誌を暖かく見守ってくださいますようお願いいたします。末筆ではありますが、皆様のますますのご健勝と御隆盛をお祈り申します。最後に上岡さん、酒井さん、ご家族の皆様にご心からの感謝を込めて、ありがとうございます。笑い声の絶えない日常がこれからも続きますように。

パラパラマンガ作家紹介

本誌の左下と右下をパラパラして下さい。何かが動きます。若手作家の力作です。

Shimo

サトウチユウコ

●しおん

(左ページ)
郷内ユウコの腰巾着。漫画やイラストの創作を中心に活動中。

「春を呼ぶ」
ウグイスの歌声に感動した桜が花を咲かせる感覚を想像して、春の訪れを表してみました。

●郷内ユウコ

(右ページ)
しおんの友人。色鉛筆が好きで、マンガやイラストなどを作成している。

「花咲いて春」
穏やかで少し切ないような、春の訪れを描いてみました。

「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」の発行に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する心とか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」を発行する。

《 M・O・H通信概要 》

■目的

- (1) 循環型社会構築に向けた意識改革
- (2) 浪費型社会通念の脱却
- (3) 人生哲学を学ぶ

■事業

- (1) 通信の発行及び出版
- (2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111

滋賀県長浜市

川道町759-3

循環型社会システム研究所

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

e-mail:tsujimura@

shingoshu.co.jp

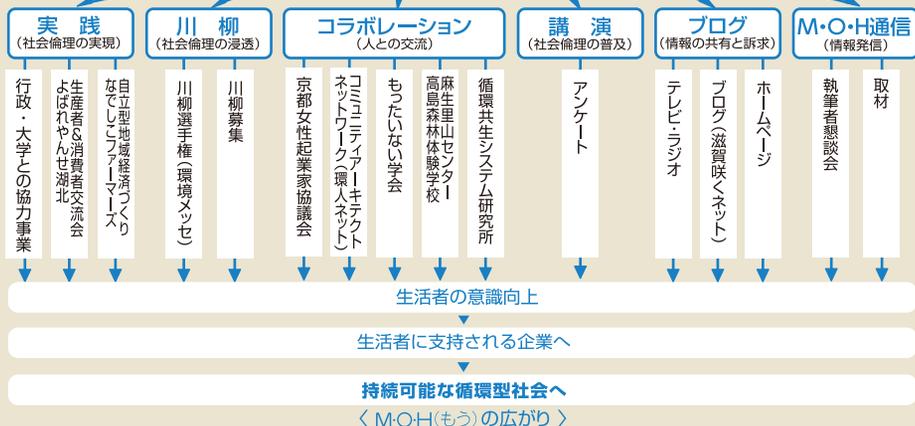
代表:森 建司

担当:つじむら ことみ

上岡 瞳

[M・O・Hコンセプトシート]

M・O・H＝循環型社会をめざす言葉
(もったいない・おかげさま・ほどほどに)



読者の声

★「人々に真の幸せをもたらす社会システムとは何かを、一人一人が熟慮するべき時が来ていると思います。」の言葉が心に残りました。

甲賀市 山中淑江

★10周年記念とのこと、おめでとうございます。10年間続くというのには普遍的な真理を提供していることの表れですから心より敬服いたします!!

彦根市 弘中史子

★M・O・H通信は娘から（私が丑年生まれと川柳が好きということもあり）貰いました。内容が盛り沢山で充実して何よりM・O・Hの精神が良いなと思いました。次号の田原総一郎さんの寄稿、嘉田知事と小林隆彰さんと森建司さんの対談、ぜひとも読みたいなと思います。今号の「大阪くらしの今昔館」に行こうと思いました。

大津市 石橋能聖子

★「住△ハ△澄△ナリ△過去（思い出）を育てて未来を創る」の寄稿文には大いに共感します！

大津市 初宿文彦

★42号届きました☆表装イメーজチェンジですね。昭和のレトロ感みたいな！素敵です☆

草津市 高屋佳典

★M・O・H通信お送りいただき有難うございます。楽しく拝読させていただきます。安藤満

★愛読しております。

西村典之

★「流域治水」ってなあに？としてたいへん判り易くおまとめいただき、ありがたうございます。早速、読者から県庁あてに、「わかりやすい！」との声が届いています。流域治水の取り組みが、今後も進むよう、頑張ってくださいませ。

流域治水政策室 辻光浩

★美の滋賀の記事があり、発信室も喜んでいます。流域治水もわかりやすく載っていますね。県の取組が別の主体から発信されることは押し付けがましくなく、自身が発信する時に何倍もの効果があると思います。改めて感謝します！今回も表紙はいい味わいですね。

大津市 松田千春

★素敵な表紙のM・O・H通信冬号が届きました。しかも、ふくろうマグネットをご紹介していただいています！ありがとうございます！

太陽生命保険 秋山清重

M・O・Hせんのゆづ

♪米を研ぐ 零す米粒 勿体ない

♪爪に火を 点す暮らしも 御蔭様

♪何事も 中庸が良し ほどほどに

小西寛信

♪身勝手な 新党離党 ほどほどに

♪もったいない まだまだ使える なにもかも

♪もったいない 自然の恵 使わずに

長浜市 伊香の退屈男

《次号予定》

2014年6月発行予定

■特集：生活の中から未来をかえる
～more moh～

- M・O・H新店／グリーンキッチン
- 鼎談／北川陽子氏＋辻博子氏＋森建司
- 取材／丸三ハシモト株式会社
- レポート／M・O・H cafe

ほか

- 連載／通常通り

《次年度予告》

■テーマ：地域力&文化力つくり
～循環型社会～

※予告なく変更いたします

編集後記

★10周年おめでとうございますいろいろな人が登場するM・O・H通信。これからも楽しみにしています。……………(古田)

★おかげさまで10周年。創刊号から読み返すと、これまでたっくさんの方々にご登場、ご支援賜っていることに、感謝の想いで胸がいっぱいになりました。私が関わってたった2年ですが、次の10年に向けて“more moh”！挑戦し続けたいと思います。……………(ひとみ)

★普段からもったいない事ばかりな生活をしている私がM・O・H通信に関わらせて頂く事によって何か変化がうまれますように……(たかお)

《M・O・H通信》受付中!

あなたも「M・O・H通信」を読んでみませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。あなたの活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

お名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、

《M・O・H通信》申込書 0749-72-8681

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住所	〒		
電話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M・O・H通信 Vol.43(通巻44号) 2014年3月20日発行 発行部数6,500部

●編集・発行/新江州(株)

循環型社会システム研究所
M・O・H 通信編集局

代表 森 建司
編集長 つじむら ことみ
編集 上岡 瞳
取材 山崎 彩
古田 紀子
北井 香
丸山 紗千代

デザイン 伊達デザイン室
写真 辻村写真事務所
表紙 たかおともみ
印刷 ブランセル
ホームページ ブランセル

●執筆者懇談会

内藤 正明 今関 信子
海東 英和 堤 幸一
山田 朝夫 進 ひろこ
下西 康嗣 中村 誠
末永 國紀 笹山 千怜
花田 真理子 結城 美枝子
弘中 史子 松崎 和弘
畑 裕子 井上 昌幸
山崎 隆 辻村 耕司
三山 元暎 佐々木 洋一
加藤 みゆき 徳永 拓美
清水 安治 山口 美知子
檀上 俊雄 岡部 達平
森 孝之 豊田 一美
堀越 昌子

(順不同・敬称略)

●ご協力

滋賀県
琵琶湖環境科学研究C
もったいない学会
循環共生社会S研究所
高島森林体験学校
麻生里山センター

滋賀県立大学
近江環人 地域再生学座
NPO法人環人ネット
野洲生活学校
EEネット
中小企業家同友会
(順不同)

●支援

新江州(株)
〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8681

★ブログ★
<http://moh.shiga-saku.net/>

★ホームページ★
<http://www.mohmoh.jp/>

MOH図書館

検索 

※記事中の写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。

